

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

二〇一三年度 第二回公開セミナー

『坪井正五郎』の著者川村伸秀氏を囲んで

日時…二〇一四年二月三日（木） 一五：〇〇～一九：〇〇

場所…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

三階マルチメディアセミナー室（三〇六号室）

基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」	1
二〇一三年度 第二回公開セミナー	
『坪井正五郎―日本で最初の人類学者』(弘文堂、二〇一三年)の 著者川村伸秀氏を囲んで	
司会…真島一郎	
I 著者による概要説明	4
川村 伸秀	
II コメント	
佐々木史郎(国立民族学博物館)	20
清水 昭俊(AA研フェロー)	27
関 雄二(国立民族学博物館)	36
山路 勝彦(関西学院大学)	44
III 全体討議	56
基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」とは	61

(司会) それではA A研の公開セミナーを始めようと思います。本日は、昨年、『坪井正五郎』というご本を出版された川村伸秀さんをお迎えして、ご講演を兼ねて、皆さんで『坪井正五郎』のことについて語り合おうという企画です。

本日この会に川村さんにお越しいただいた経緯を申しますと、昨年三月に山口昌男先生がお亡くなりになられ、それを受けてA A研では、昨年六月に山口昌男追悼シンポジウムを開催しました。その際に準備作業等で、川村さんが既に発表されている山口先生の年譜等、事実関係に関するデータをかなり利用させていただきました。と申しますのも、川村さんは『山口昌男山脈』全五巻をはじめ、公私ともに生前の山口先生の最もお近くにおられた方のお一人として、山口先生のお仕事の編集だけでなく、山口先生の生涯についてもずっと考え抜かれている方です。実はそのシンポジウムの後も、今その編集は作業中なのですが、山口昌男の追討論集をA A研から出版するということで、これも川村さんに大変なご尽力を頂きまして、つい先日、ほぼ完全版と私は見えています。山口何月何日という日付一日たりともゆるがせにしないような、非常に精密な昌男先生の生涯の年譜をご寄稿いただきました。本日は、ちょうど昨年のシンポジウムが開かれた三カ月後の二〇一三年九月三〇日に初版が出た、川村さんの坪井正五郎伝をA A研の人類学スタッフが取り上げ、いろいろ学ばせていただく機会にしたいと思った次第です。

最初に川村さんから、このご著作、並びに坪井正五郎についてお話を頂いた後、ご足労いただいている四人のコメントーターにコメントを頂きます。お一人目が国立民族学博物館(民博)の佐々木史郎さんです。そして、本研究所のフェローで、一橋大学の名誉教授でいらつしやる清水昭俊さん、同じく国立民族学博物館の関雄二さん、関西学院大学の山路勝彦さんです。時間をゆつくり取ってありますので、その後、全体で語り合えればと思つていきます。



最初に自己紹介を手短にお願いでできればと思います。まず、私から申し上げます。今日、司会を務めさせていただくA A研の真島一郎と申します。人類学の勉強をしていて、主にフランス語圏の西アフリカをフィールドにしています。よろしく願います。

**(西井)** 同じくA A研の西井と申します。私も人類学を専攻しています。主な調査地が南タイで、これまでイスラム教徒と仏教徒の関係を調査してきました。よろしく願います。

**(山路)** 山路と申します。私はもともと大学院からずっと人類学の看板を立てていました。ここ十数年は何をやっているのか骨董品集めに精を出しています。とりわけ紙類資料が大好きで、明治からの博覧会関係のポスターや絵葉書など何だかんだと集めています。

**(三尾)** A A研の三尾裕子と申します。文化人類学を専門にしており、主なフィールドは台湾と東南アジア、ベトナムの中国系移民です。よろしく願います。

**(藤野)** A A研の研究機関研究員の藤野と申します。台湾を中心に東アジアのキリスト教を宗教学人類学的に研究しています。どうぞよろしく願います。

**(鳥越)** 私は福岡から来ました西南学院大学大学院修士一年の鳥越久美子と申します。坪井正五郎と児童に関する研究を今後行っていきたいと思っています。よろしく願います。

**(中見)** A A研の中見と申します。専門は東アジア・内陸アジアの国際関係、外交史です。ただ、あるときから日本人のアジア認識を世界の中で見るということで、東洋学アジア研究史をやっていました。今日は皆さんのお話を楽しみにしています。

**(中生)** 桜美林大学の中生勝美と申します。専門は中国を中心とした東アジアの人類学ですが、人類学史も同時に研究しております。人類学の歴史はいろいろタブーもあったりして難しいところもあるのですが、このように非常に良い本を出していただいて、ありがとうございます。

**(栗原)** A A研の栗原と申します。私はベトナムの現代史を中心に研究しています。よろし

く願います。

(太田) 太田と申します。よろしく願います。

(高島) A A研の高島と申します。宗教学でヒンドゥー教を専攻しています。今回、フィールドプラスのところで山口昌男の特集を少しだけ担当させていただきました。

(佐々木) 民博の佐々木と申します。専門にしているのは人類学ですが、ロシアのシベリア地域の先住民族の研究をしており、歴史学者っぽいこともやっています。

(関) 民博の関です。私は中南米の考古学と文化人類学、文化共生や文化遺産の保全の研究をやっています。私は川村さんが引用されている『日本の人類学』の著者である寺田和夫の最後の弟子です。寺田さんが亡くなった後、『日本の人類学』を思索社で再版するという話があつて、そのときに掲載していた写真を全部必死に探したのですが、最後まで見つからないものがありました。そのうちに思索社が潰れて角川から再版されましたが、その後、東大の博物館において鳥居龍蔵の展覧会を私が企画したので、川村さんのテーマにかすつてはいるのですが、専門ではないので、どこまでコメントできるか分かりません。よろしく願います。

(清水) 清水です。元広島大学、元民博、元一橋、今、A A研フェローです。文化人類学でずっと仕事をしてきましたが、最近、少し人類学の歴史を勉強していきまして、戦時中から始めて遡って、ようやく坪井の世代まで到達しました。今回は勉強させていただきます。

(佐久間) A A研の研究機関研究員の佐久間です。専門は文化人類学で、特に西アフリカのニジェール西部のソンガイ系社会についての研究を行っています。よろしく願います。

(司会) では、早速、川村さんにお話を頂こうと思います。

## I 著者による概要説明

『坪井正五郎―日本で最初の人類学者』（弘文堂、二〇一三年）概要

川村 伸秀 氏

僕はもともと編集をやっておりまして、人類学は全くの素人です。今日は人類学の皆さんが集まる会ということで、素人の僕が人類学者の話をするのは釈迦に説法のような気がしているのですが、一〇〇年前の忘れられてしまったような人類学者の話ですので、皆さんに、こういう人がいたのだということを出していただければと思います。

編集をやっている関係で、つい人の気を引くようなタイトルを付けたがるものですが、この本には「日本で最初の人類学者」というサブタイトルを付けたのですが、本当に坪井正五郎が日本で最初の人類学者なのかというと、ちょっと怪しい。そこで調べてみますと、世界で最初にフランスの人類学会に入った日本人が福地源一郎（福地桜痴）という人でした。この人は幕末に幕府の使節としてヨーロッパに行き、向こうでレオン・ド・ロニーにフランス語を学びました。レオン・ド・ロニーは東洋学者ですので、多分、福地から日本の事情を知ろうと思って先生を引き受けたのではないかと思います。そして日本に帰ってきて、明治になってから福地源一郎は『江湖新聞』を出したり、『東京日日新聞』を出していた、今の毎日新聞社の前身の新聞社に入って、その社主になったりするのですが、人類学的なことを書いているわけでもなければ、そういう研究を行ってもいないので、多分、レオン・ド・ロニーからそのかされて成り行きで人類学会に入ったんだと思います。ですので、ちょっとこの人は違うだろうと思います。



もう一人、気になったのは小金井良精というお医者さんです。この人は新潟の長岡で生まれ、東大の医学部に入って、そこからドイツに留学するのですが、向こうで解剖学を勉強して、明治一八年に帰国します。坪井が人類学会をつくるのが明治一七年なので、坪井のほうが少し早い。もう一つ、小金井良精の場合は体質人類学をやっていましたので、解剖学の方から入ってそちら側に移ったのだと思います。坪井の場合は総合人類学といえますか、今の皆さんのやられている文化人類学につながるようなこともやれば、考古学もやれば、言語学もやるし、フォークロアみたいなことにも手を出すということ、人に関する全般的なことに興味を持っていたのだろうということ、やはりここは、坪井を最初の人類学者と言っているのではないかと思います。

今日はこの本の概要をということでしたので、本の各章の最初にリードとして付けたものが概要に当たると思いますが、それを抜き出してペーパーにしてみました。これに沿って、お話していきたいと思えます。

## 第一部 人類学へ

坪井正五郎は一八六三（文久三）年正月五日に両国の矢ノ倉で生まれています。お父さんは信良というお医者さんで、松平春嶽に仕えていました。松平春嶽は井伊直弼と対立して失脚するのですが、井伊直弼のほうが例の安政の大獄などいろいろやって問題になり、桜田門外で暗殺されてしまいます。そこでまた、春嶽が表舞台に復帰して、春嶽に仕えていた信良も将軍や大奥付きのお医者さんである奥医師になっています。その後大政奉還があり、慶喜が静岡に蟄居することになって、坪井家も一緒に行くこととなります。これは坪井が五歳の頃のことです。当時、慶喜に従って幕臣の人たちがたくさん静岡に行ったのですが、そこで

給料をもらえるわけでもないのです、ついていった人たちは非常に苦勞したようです。例えば、最後の浮世絵師と言われていた小林清親なども、その頃は剣術の見世物のようなことをして暮らしていたようです。ただ、信良の場合はお医者さんで、手に職を持っていたので、林研海や戸塚文海などと一緒に駿府病院をつくって、そのの先生をしていました。また、静岡に御薬園という幕府直轄の菓草園があり、明治になってだれが小さくなっていったらしいのですが、駿府病院のほうでこの御薬園の管理を任されていました。坪井正五郎が九歳のときに、そこでスケッチをして、『草花画譜』という、これはまだ東大に現物が残っているのですが、筆で描いた植物画をいろいろ描いています。もともと坪井正五郎は博物学的興味が強かった人で、江戸時代なら、本草学者のようなものになっていたのではないかと思います。

坪井は明治一〇年に東大の予備門に入るので、その頃、ちょうどエドワード・モースが品川の大森で貝塚を発見して、貝塚から土器や矢じりなどが出てきて、坪井もそれに刺激を受けて、発掘に熱中するようになります。当時、人類学や考古学はまだ確立されていない時代でしたので、坪井も随分、人類学とは言いながら、考古学的なこともやっていたようです。坪井は人類学者なのになぜ考古学をやったのかについて、人種を考える手がかりをそこから得たいからだと言っています。手が付けやすいことと、今やらないと破壊されてしまうのではないかとという心配も持っていたようです。当時、地面は今のように入アスファルトで舗装されていないので、あちこち掘ると、すぐに土器や矢じりが出てきて、運動にもいいというので、アマチュアの考古家もたくさんいたようです。

あるとき、坪井正五郎と、友人で後に海軍中将になる有坂鉛蔵が弥生町で一緒に発掘をしたときに、薄手の土器を見つけて、有坂はそれを坪井に託します。そして坪井は『東洋学芸雑誌』に、こういう土器を発見したのだと詳細を書くのです。これが後に蒔田鎗次郎が、弥



坪井正五郎著『草花図譜』の一部\*

生式と名付ける土器です。

東大に入ったあとの坪井は、箕作佳吉の下で動物学を勉強するようになります。しかしやはり人類学的な興味が強く、先ほど申し上げたように学生時代の明治一七年には有坂鋁藏や植物学者の白井光太郎などと人類学会を設立しています。

その後、坪井は大学院に入りますが、そこでは人類学を専攻しています。当時、東大の学科にはまだ人類学科がなかったのですが、それを坪井は無理を言って人類学科をつくってもらい特別に専攻します。人類学を専攻したのはいいのですが、先生が全然いいものから、独学が坪井のスタイルになっていきます。そしてフィールドワークで静岡の京丸に行くのですが、そこは秘境のようなところで、誰も行かないので、その中で近親相姦が行われているのではないかと噂が立っていたところでした。ただ、実際に坪井が行って調べてみると、里の人たちはそこに行かないけれども、そこにいた人たちは自由に下に下りてきて交流していたので、決してそういうことはなかったということを報告しています。

この京丸は今廃村になっていますが、水谷幻花という人がいて、この人が坪井の信奉者のような人だったのです。この人はアマチュアの考古家でもあり、『萬朝報』やのちには『朝日新聞』の記者を務めた人なのですが、『萬朝報』にいた時代に「朝鮮太郎」という小説を連載しています（水谷乙次郎著『幻花繚乱』川村オフィス、二〇一二年、所収）。この中で主人公がこもって別の人間に変わる重要な場所として京丸という場所が使われているのですが、多分それは坪井の文章を読んで使ったのではないかと思っています。

京丸からの帰りに、坪井はいろいろなところで削り掛けというのを見ます。削り掛けとは、白木を半分だけ削って装飾的にしたものなのですが、それがなぜ今残っているのかを、坪井は『東京人類学会雑誌』で報告して、「もしこれについて知っていることがあれば教えしてほしい」と書きます。すると他の会員からいろいろと情報が集まってきて、ああでもない、



水谷乙次郎著『幻花繚乱（好古叢書一）』（川村オフィス、平成二四年二月）CD-ROM

こうでもない論争が起きています。坪井は、そういうことを載せることでいろいろな情報が集まることを知っていて、雑誌をそういう装置として利用していたのだと思います。

明治二十一年になると、東京府の伊豆諸島調査が行われるのですが、そのときに坪井も同行して調査を行っています。坪井はイギリスの人類学者のフランシス・ゴルトンの身体測定をそこでいろいろ行っていますが、その後は身体測定を一切行っていないので、多分あまり有効性を認めなかったのではないかと思います。ただ、伊豆に行く一週間くらい前に、上野公園で目の前を通り過ぎる人を見て、和風の人もいれば、洋風の人もいる、それが混合している人もいるということ、風俗調査をしたら面白いのではないかと考えて、風俗調査をするのです。それは、人間を頭と胴体と足元の三つに分けて、それがどこまで和風なのか、あるいはどこまで洋風化しているのかを調査するのです。これが後に、今和次郎や吉田謙吉などが関東大震災の後に東京でどういう部分が変わってきたのかという調査を始める「考現学」の先駆的なことであつたといわれています。

また坪井は、ゴルトンの重ね写真にも興味を持っていて、感化院の少年をたくさん撮影しています。重ね写真とは、肖像を重ねていくと、ある種の特徴が出てくるのではないかと、その写真が六〇ページ（本冊子では、下記に掲載）に記載されています。怠け者と盗み心のある者と強情者の三つに分けて出しているのですが、どこに特徴があるのかこれを見る限りよく分かりません。ゴルトン自身も、どうも重ね写真ではそういう特徴は出ないのではないかと考えて途中であきらめているのですが、坪井は、薩摩の人とか、信州の人とか、地方の顔の特徴を調べたり、あるいは、そこから美人の特徴が割り出せるのではないか、イヌとサルを掛け合わせたらどうなるか、ウマとシカを掛け合わせたらどうなるかなど、だんだん変な方向に進んでいくのです。今、考えると、最後のほうは赤塚不二夫のウナギイヌみたいなもので、非常に発想としては面白かったのではないかと思います。ゴルトンの



感化院の少年の重ね写真、左より「強情者の相」「盗み心のある者の相」「怠け者の相」

やっていたのは優生学でしたので、後にナチスドイツにそれが流れて行ってユダヤ人の虐待などにつながっていくことを考えると、坪井のやっていたあたりで留めておいた方がむしろ無難だったのではないかと思います。

それから、大学院の頃に吉見百穴の発掘を行っています。吉見百穴については、坪井以前に柏木貨一郎などもそれについて発表しています。柏木貨一郎は幕府の小普請方という大工の棟梁みたいなことをしていた人です。文部省の博物館に入って正倉院の調査なども行っています。国宝級の美術品のコレクターでもあって、三井物産の益田孝などとコレクター仲間、あるいはライバルだったのですが、そういう人が坪井以前に調査を行い、一応そういうものがあるのは分かっていたのですが、坪井が大々的に発掘を行ったということです。吉見百穴の地主だったのが根岸武香です。この人は貴族院議員でもありましたが、人類学会の会員で、マッチのラベルの収集を趣味にしていたようです。そのラベルにはかなりめずらしいものがある。いろいろあったので、広田霞州というお抱えの画家がいて、その人と二人で東北にめずらしいマッチの収集に行ったりするのですが、あまりにもたくさんマッチを収集してしまつて持ちきれないので、ラベルだけをはがして、マッチはその場所で売って、また次に行つて収集するということをやっていたという、ちょっと面白い人です。その人が地主で、坪井に全面的に協力して吉見百穴の発掘を行っています。坪井自身は、この百穴を古代人の住居と考えていたようですが、現在ではお墓だったとされています。留学していたときにロンドンで万国東洋学会が行われるのですが、坪井はそのときにこの横穴の発掘を発表して金牌をもらっています。

また、大学院のときに、『看板考』という最初の著書を出すのですが、これは、もともと一七歳くらいときに坪井が自分で出していた手作りの『小悟雑誌』に連載していたものです。今読んでも非常に優れた内容だと思つたのですが、これは国会図書館のデジタルライブラ

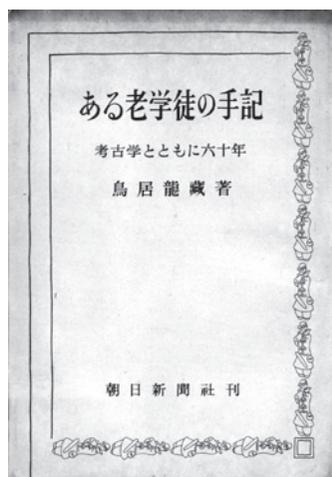


坪井正五郎著『工商技芸 看板考』(哲学書院、明治二〇年一〇月)

リーに入っていますので簡単に読むことができます。看板には大森貝塚を発掘したモースも興味を持っていて、『日本その日その日』という本にも書いてあるし、ピーボディ・エセックス博物館にモースの蒐集したいろいろなものが入っているのですが、その中に看板コレクションがあつて、ときどき日本でもそのコレクションが展示されることがあります。ただ、モース自身は日本語が話せませんでしたので、形の面白さに興味を持ったのだと思うのですが、坪井の場合は、形だけではなく、看板の持っている意味にも興味があつたので、モースと坪井の興味の持ち方は違っていたのだらうと思います。

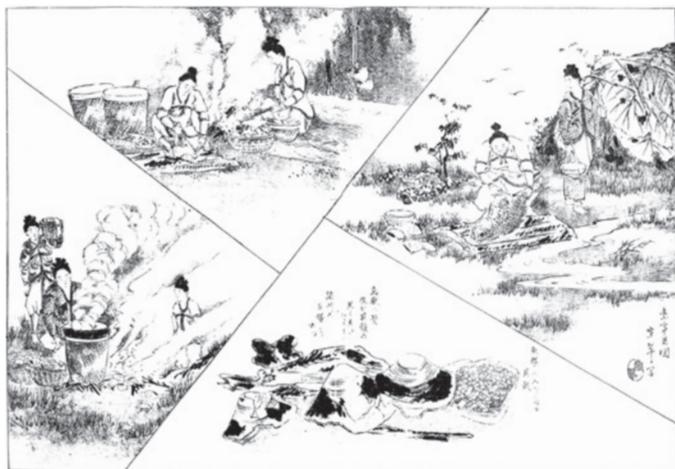
大学院のときの予備調査では、東海道から下って中国の方に行つて、ぐるっと回つて八八日間かけて戻ってくるのです。そのときのいろいろな面白い話があるのですが、一つここで気になったのは、鳥居龍蔵と坪井正五郎が最初に会つた日にちのことです。鳥居龍蔵は、晩年に書いた自伝『ある老学徒の手記』の中で、坪井と会つたのは明治二十二年二月だとしているのですが、予備調査を行つていたときに坪井が書いた日記を読むと、明治二十二年二月には坪井は宇治山田にいたことになっていのです。ですから、徳島にいた鳥居龍蔵と会うことはできなかったことが分かりました。いろいろ調べていくと、実際には坪井は同年の一月一三日に出発して九州の日岡古墳に発掘に行つていて、どうもその帰りに徳島に寄つて鳥居龍蔵に会つたのではないかと、従つて、明治二十二年一月末か一二月前半ではなかったのかと僕は思っています。

第八章では、コロボックル論争について述べました。コロボックル論争はよく訳の分からない論争なのですが、寺田和夫さんが、明治時代の人類学史上最大のテーマだと述べている論争です。日本の先住民はアイヌだったのかコロボックルだったのかというのがこの論争なのですが、調べていくと、予備門で一緒だった渡瀬庄三郎が札幌農学校に行き、札幌農学校にいた頃にも坪井に手紙やはがきなどをいろいろ送つてきています。その中に、札幌



鳥居龍蔵著『ある老学徒の手記』考古学と共に六十年（朝日新聞社、昭和二十八年一月）

近郊に五〇〜六〇の横穴が空いていて、そこにコロボックルが住んでいたという噂があると、いうことを坪井に書き送ってきていて、それが『小椋雑誌』の中にも記されています。実際に渡瀬庄三郎がその場所に行つて見たのかどうかは分からないのですが、『小椋雑誌』に載っている段階では、雪がたくさん降っていて、そこにはまだ行けない状態だと書かれています。この渡瀬庄三郎が札幌農学校を卒業して東京に戻ってきて東大に入るのでありますが、そのときに『東京人類学会雑誌』にコロボックルの話を載せるのです。そうすると、のちに植物学者になる白井光太郎がそれに対して、コロボックルというのはアイヌの伝説に過ぎないから、そんなおかしいことはない、同じ雑誌の中で反論するのです。すると坪井が、いやそんなことはない、コロボックルの可能性は否定できないということを書べます。一応、白井の方はそれで黙ってしまうのですが、そうすると今度は小金井良精が、そこにいたのはアイヌだったのだろうと言いつつ始めて、だんだん論争が広がっていきます。一番コロボックル論争がみんなに知られるようになるのが、『風俗画報』に坪井が「コロボックル風俗考」を書いたときだったと思います。『風俗画報』は二万五〇〇〇部も出していた雑誌でしたので、一般にもかなりコロボックル説が広がったようです。その中で坪井は、コロボックルというのはあくまでも名称として使っているだけで、背は低かったけれども、おとぎ話に出てくるような小人ではないのだと言っているのです。ところが僕が気になったのは、勅使河原彰さんが「坪井正五郎と人類学会の誕生」という文章の中で、「坪井は雑誌の中で小人の絵を描いていて、そんなことを坪井自身は信じていなかったにも関わらず、コロボックルがいたようなことを言っている」と述べているのですが、どうもそれは違うのではないかと僕は思っています。また、最近、瀬川拓郎さんという方が、『コロボックルとはだれか』（新典社、二〇一二年）という本を書いていて、それによると、中世にまで遡るコロボックル伝説があるけれども、当時の文献資料や考古資料は限られていて非常に少ないということです。そういうこと



「コロボックル風俗考」に掲載された図（素亭君図、空翠写）

から考えても、坪井自身がコロボツクルを信じていたとしてもおかしくはなかったのではないかと思います。

その後、坪井はパリとロンドンに官費留学をして、パリ万博を見学してロンドンに移るのですが、そのとき、師にもつかないし、大学にも入らない、大英博物館に行つて人類学の体系化をひたすら模索していたという状況がありました。当時、人類学者のエドワード・タイラーがロンドンにいて、坪井に会いたいと言つてきているのですが、坪井自身は、どうも会うこと自体も拒否して、——のちに、一度だけ会つてはいますが——タイラーは時代後れであると、当時の日記の中で書いています。むしろ坪井が会つた人で坪井に影響を与えたのではないかと思うのはアルフレッド・ハッドンの方です。この人は海洋生物学をやつていた人なのですが、トレス海峡でサンゴ礁の調査をしているうちに、その辺の住民の方が気になつてしまつて人類学の方に転向する人です。イギリスでいろいろ坪井の世話を焼いてくれて、イギリスの人類学会に推薦もしてくれた人です。

## 第二部 人類学から

イギリスから帰つてきた坪井は、東大で人類学を教えるようになるのですが、そのとき、人類学教室に集まつてきたのが、鳥居龍蔵や八木槎三郎、大野延太郎などで、地方でも人類学会がどんどん起こつてきて、だんだん日本でも人類学が盛んになるような状況になります。

一方で坪井は明治二九年に人類学会の茶話会みたいなものをつくつてはどうかということを提案して、人類学教室にいた人たちが発起人になつて集古会ができます。集古会は、あまり人類学会で堅苦しいことをやるよりは、ちよつと息抜きの会をつくつて交流したらどう

かということが始まるのですが、だんだん清水晴風や林若樹のような江戸派の人たちが、趣味家の集まりとして引っ張ってしまって、結局、人類学の話がしたかった鳥居龍藏などは、どうも違うのではないかとやめてしまうのです。集古会自体は昭和一九年まで続く長い会になります。坪井自身は江戸に生まれて、江戸にも興味がある人だったので、初期の集古会には毎回出席していたようです。

次に第十二章では「うしのよだれ」について書きました。「うしのよだれ」は雑誌『学士会月報』に明治三二年一月から連載していたもので、一回、坪井が生きているときに単行本になります。それは連載の中から抜粋した一〇〇話を集めたものだったのですが、『学士会月報』には坪井は死ぬまでずっとこの連載を書き続けていました。この「うしのよだれ」というのは、最初は短い随筆を並べたようなものだったのですが、だんだん実録笑話集みたいになっていって、雑誌に載せているうちに、こういう面白いことがあった、ああいう面白いことがあったと読者からはがきが来て、それを坪井がどんどん載せていく形になりました。今見ると、笑い話としてはそんなに面白くはないのですが、むしろその中に描かれている風俗から生き生きと時代が見えてくるところが面白いのです。今、坪井正五郎が生きていたら、おそらくブログもしくは「Twitter」をやって、読者と交流を図っていたのではないかと思います。

その次の第十三章では大阪の第五回内国勸業博覧会について書きました。これは明治三六一年に行われたもので、そのなかのパビリオンの一つであった人類館の中で生身のアイヌや沖縄、台湾の人たちを展示して非常に問題になったものです。坪井自身はパリ万博で人間の展示を見ているので、その展示を企画したのは坪井だろうといわれているのですが、どうも当時の資料を見ても、坪井がそれを企画したとははっきり書かれていないので、企画したかどうかは断定できないのではないかと思います。その後、大正時代になって拓殖博覧会が行わ

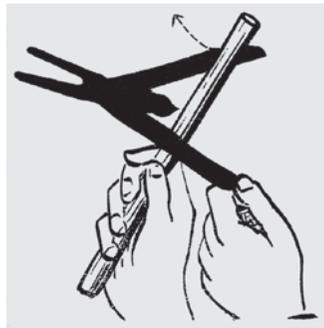
れたときには、はつきりと人間の展示を坪井が企画してやっていますので、この点では批判されてしまうのではないと思います。ただ、坪井は展示された側の人たちが、生物学的に劣性であると考えていたわけではないと思います。教育が普及していないからアイヌなども後れているので、もっと教育すべきであるといつて、教育普及などにも坪井は力を入れます。もし坪井に問題点があるとすれば、そういう状況にアイヌの人たちが置かれなければいけないかということにまで想像力が及ばなかったところではないかと思っています。

また、この章ではもう一つ、坪井の人種に対する考え方について触れました。坪井は、日本人はアイヌと朝鮮人とマレー人の混合したものであると考えていたようです。ただ、これは坪井自身が考えたというよりは、エルヴィン・フォン・ベルツの論を援用してきたのではないかと思います。当時、日本は朝鮮や台湾を植民地化していたので、日本人が指導的な立場にあるとは考えていたと思いますが、それもやがて、かつてアイヌや朝鮮、マレーの人たちが混合して日本人になったように、長いスパンの中で考えれば、いずれその日本人も朝鮮や台湾の人たちとの国際結婚が頻繁に行われるようになって日本人自体も変わってくると、坪井はそう考えていたのではないかと思います。ただ、ここでも、植民地化される人たちの立場に立った想像力が坪井の中にはなかったということが、僕は問題ではないかと思っています。この辺は山路さんのほうが詳しいと思いますので、後ほど補足していただければと思います。

次に扱ったのが、東京人類学会の創立二十周年記念で千葉の堀内古墳に遠足に行ったことです。遠足といっても、発掘をするわけです。このときには人類学教室の人たちやアマチュアの考古家、先ほど申し上げた水谷幻花や、尾崎紅葉がつくった硯友社の作家だった江見水蔭なども参加していますし、帝大の学生、早稲田の学生、植民地学校の学生なども参加しています。面白いのは、徳川達孝・頼倫、二条公、蜂須賀正韶など、華族といわれていた人たちもこの中に参加していたことです。これは坪井が当時、華族人類学会の人たちにも人類学

を教えていたためだと思うのですが、ヴィクター・ターナーの言っているコミュニティタス状態、役割や地位などに関係なく、一緒に自由に交流する状態が、完全とは言えないまでも、ある程度この遠足でできていたのではないかと思えます。この中で面白いのは頼倫です。頼倫は南紀文庫という図書館をつくって一般に開放し、展示や講演会を行っています。震災で東大の図書館が焼けてしまうと、その蔵書を全部寄付して南紀文庫は閉めるのですが、坪井もこの南紀文庫にはいろいろ関係していて、おもちゃの展示に協力したり、講演などを行ったりしています。また、日本に何回も来ていたフレデリック・スターという人類学者がいたのですが、坪井はこの人と親しくしていて、頼倫に紹介したりしています。

第十五章では三越百貨店との関係を扱いました。坪井は三越と非常に深く関係しています。結びつけたのは巖谷小波という、これも先ほどの江見水蔭と同じ硯友社の作家です。この人は一名、「お伽のおじさん」と呼ばれており、『こがね丸』という児童読み物を書いてデビューした人で、日本昔噺や日本お伽噺などをたくさん書いていた作家です。それを書いた後に、世界お伽噺を書こうとして、材料を探しに坪井のところにやってきて坪井と親しくなるのです。小波は一方で三越のブレン組織であった流行会に関係していたので、その会に坪井を誘います。この流行会は三越の専務の日比翁助が考えたものです。当時の流行を研究して、それを三越の商品などに採用していかうと考えていたようです。坪井もそれに協力するようになって、その後は児童用品研究会にも参加して、いろいろなアイデアを出しています。これは流行会に入る前なのですが、多分、小波との関係から、燕がえしというブーメランのおもちゃを考案したり、児童用品研究会の参加以降はマーストヘンゲルという、体を四つとか六つとかに分けていろいろな人が変わっていくおもちゃや「兎と亀」という、さいころを振って遊ぶ、すごろくの変形みたいなおもちゃ、あるいは、画家の杉浦非水が絵を描いて『ウミトヒト』という絵本をつくったり、いろいろ面白いことをやっていたようです。



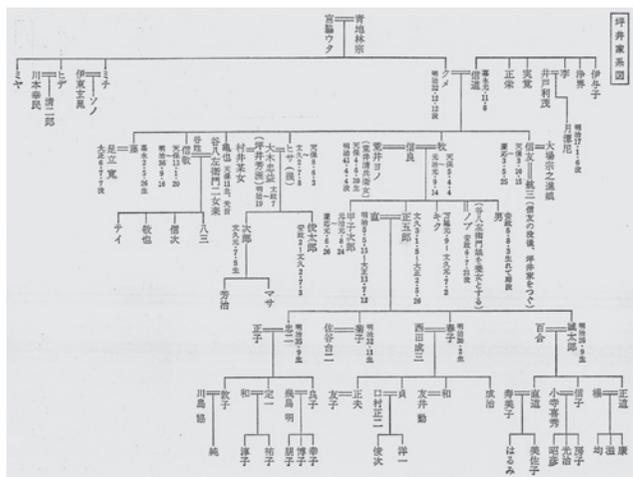
燕がえし



絵本・坪井正五郎著『ウミトヒト』(杉浦非水・画)\*

次に、諏訪湖の杭上住居について書きました。湖沼学者の田中阿歌麿の助手をしていた橋本福松という人がいました。この人が阿歌麿の依頼で諏訪湖の底をさらうと大量に矢じりなどが出てくるのですが、そのときに福松は、昔そこが陸地で、それが陥没して湖になったのだらうと考えるのです。それに対して坪井は、そうではなくて湖の上に杭上住居があったのだらうと考えて、諏訪湖に二回、近くの野尻湖にも一回、調査に行っています。なぜ坪井がそのようなことを考えたのかといいますと、ヨーロッパに留学した際にサイゴンとシンガポールで水上生活者を見たことと、もう一つは、当時、坪井くらいしか読んでなかったようなロバート・マンローの『ヨーロッパの湖上住居』、あるいは杭上住居について触れたモーリツ・ヘーネスの『太古人類』を読んで、希望的観測で日本にもそういうものがあつたら面白いのではないかと考えて、そちら側に引つ張られていったような気がします。実際には福松が言ったことが正しくて、地殻変動で土地が陥没して湖になったことが何十年も経つて分かります。この福松はその後、地理学関係の出版社を設立して古今書院をつくった人です。

次の一七章は坪井の世界一周について述べました。明治四四年七月から翌年三月まで世界一周旅行の旅に出た坪井は、あちこちの博物館を見て歩きました。日本に人類学の博物館をつくりたいという夢が、坪井の中にはあつたようです。この旅でいろいろな面白い人たちに会っています。特にロンドンでは、先ほど申し上げたハッドンに再会して、ハッドンの家に泊まつたりしているのですが、そこに神話学者のジェーン・ハリソンがやつてきたり、ハッドンの紹介だつたと思うのですが、ジェームズ・フレイザーに会いに行つたりしています。ボストンではモースに再会したり、シカゴではフレデリック・スターにまた会つたり、そのスターから今度はフェイ・クーパー・コールやベルトルト・ラウファーという人類学者を紹介されたりしています。ラウファーは、博品社という今は潰れてしまった出版社の博物学ドキュメントシリーズとして、『キリン伝来考』や『サイと一角獣』というような本がい



坪井家・佐渡家・長崎家・宮地正人編『幕末維新風雲通信——蘭医坪井信良家兄宛書翰集』(東京大学出版会、昭和五三年二月)

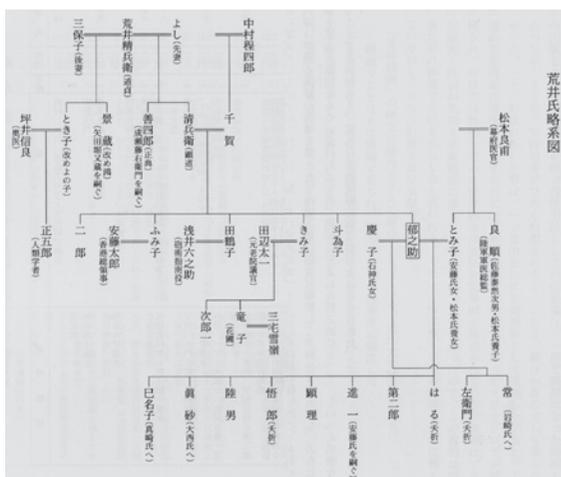


人が富山藩士林太仲の養子となり、林忠正となります。坪井が開成学校の官費生のときに、この人に憧れて、自分も官費生になりたいと言っていました。この人も東大に進むのですが、お父さんの太仲が失脚して東大を辞めざるを得なくなり、パリ万博の通訳としてパリに渡って、その後、美術商になって浮世絵のジャポニスムブームきっかけをつくります。

もう一回、坪井家系図に戻っていただいて、信良の結婚した信道の娘である牧は、正五郎を生んでからしばらくして死んでしまいます。再婚したのが荒井ヨノという人です。

荒井ヨノの家系図が荒井氏略系図です。とき子（改めよの子）と一番左にあります。そのお父さんに当たるのが精兵衛で、精兵衛の孫に当たるのが荒井郁之助です。この人は榎本武揚と一緒に五稜郭にもつて戦った人なのですが、明治になってから自然科学の知識を生かしてメートル法を導入したり、後には中央気象台の初代台長になったりしました。この人から坪井は、陸奥や後志の古物を預かって、ますます興味を持つたと自伝の中で書いています。郁之助の奥さんの右側に松本良順がいます。その人の甥が江戸通の林若樹になります。郁之助の三つ左にきみ子がありますが、この人と結婚したのが田辺太一で、その娘の竜子が田辺花圃という、『藪の鷲』という小説を書いて明治初の女流作家になった人です。柳田泉によれば、内田魯庵の失恋相手が、この竜子だったということです。竜子は三宅雪嶺と結婚しています。それから、郁之助の息子に陸男がいますが、この人が画家になった人で、ロンドンのアトリエで坪井はこの人に会っています。

最後に箕作家の系図があります。この中に坪井正太郎とあるのは坪井正五郎の間違いです。坪井正五郎と結婚したのが直子で、お母さんは違いますが、直子のお兄さんに菊池大麓や、坪井の生物学の先生だった箕作佳吉がいます。その系図をたどっていくと、大麓の娘に千代子がいて、この人が鳩山秀夫と結婚します。鳩山秀夫がボン大学に留学しているときに坪井が亡くなったので、骨をベルリンまで運んできたのが、この人です。鳩山秀夫のお兄さ



荒井氏略系図…原田朗著『荒井郁之助』(吉川弘文館、平成六年七月)

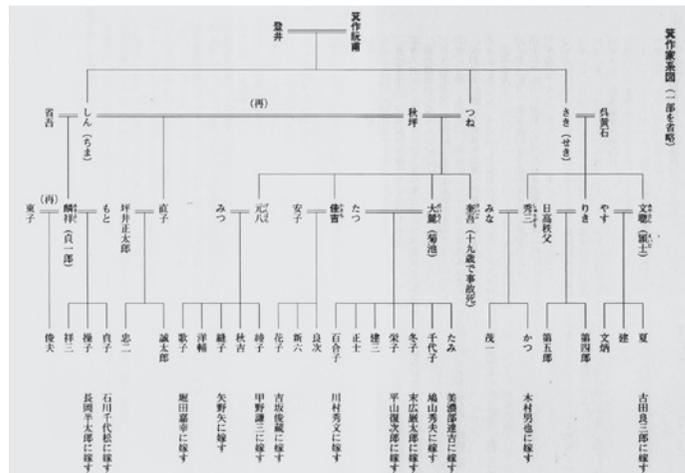
んが鳩山一郎で、その孫が元首相の鳩山由紀夫氏です。

家系図をたどっていくといろいろと面白いことが見えてくるところで、終わりにしたいと思います。

**(司会)** ありがとうございます。私は、最初に小難しい顔をしてこの川村さんの本を読ませてもらうとしたのですが、最初の第一ページから、考古学の石器と土器にかけた、「心はせつつき、胸はどきどき」という坪井の狂歌のパンチをくれました。それは坪井正五郎のパンチというよりは川村さんのパンチだったのですが、他方で、この著作が出版されるやいなや、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、そして図書新聞では二面にわたって矢継ぎ早にこの本の書評が出て、いずれも「大変な力作である」と評価しています。とりわけ毎日新聞の書評の中のある一文には、「専門の学会にしろ、趣味の集まりにしろ、著者は実によく調べ、例え一つの細部でもあやふやにしない」と書かれています。

「心はせつつき、胸はどきどき」の方面でも構いませんし、具体的な細部にまで踏み込んだ事実関係でも構いませんので、コメントを頂ければと思います。佐々木さんからお願したいと思います。

箕作家系図・玉木存著『動物学者 箕作佳吉とその時代―明治人は何を考えたか』(三一書房、平成一〇年一〇月)



図版中、\*マークのついたものは東京大学大学院情報学環所蔵

## II コメント

## 佐々木 史郎 (国立民族学博物館)

川村先生、どうもありがとうございます。非常に興味深いお話で、全く私の知らないところもあり、坪井正五郎は私も関心を持っていたのですが、ここまで奥深い人間ということを知りました。私からは、コロボツクルに絞ったコメントをさせていただきたいと思えます。

コロボツクル論争については、既に川村先生の本に詳しいことは書かれていますので、今更、私が細かく言うことはないかと思うのですが、突き詰めれば、日本列島の先住民は誰なのかという論争です。片やアイヌという説と、いや、アイヌではないコロボツクルという別の先住民を考えないといけないという説があり、今の人類学ではこういう話にまとまってしまっているのではないかと思います。

従来、私たちが教科書的に教わっていたのは、鳥居龍蔵以下、後世の研究者による研究です。決定的だったのは鳥居の千鳥調査でしたが、その結果、コロボツクルなる人間の存在は証明できずに、出てくるのは、そこに住んでいた人たちがアイヌであったことを示す実証的な証拠ばかりだということで、コロボツクル説はほとんど劣勢に置かれていって、坪井正五郎の死とともに消えていくという形で語られていたのではないかと思います。私もずっとそう思っていたのですが、故あって鳥居龍蔵の千鳥調査のことや、鳥居龍蔵の日本人論・日本文化形成論のようなものがあるのですが、そういうものを調べていくと、少し別の事実突



碑に登場する小人「コ  
人)である。  
・坪井と白井光太郎、小

き当たりました。

ご覧いただいているのは、坪井が残したコロボツクルの別の絵です。これは明治の終わりがらいだったと思いますが、坪井自身が描いた絵ではなくて、専門の画家に坪井正五郎が知識を渡して描かせた、穴居民としてのコロボツクル像です。これは東大の総合博物館にあるものです。

川村先生が書かれていましたが、鳥居龍蔵の「ある老学徒の手記」による説明とはどうも少し違うようで、坪井正五郎と報效義会会長の郡司成忠との出会いは、鳥居が言ったような形ではなかったことは、坪井のいろいろな著作からも分かるようです。ただし、坪井自身は時間がなくてできないということで、弟子であった鳥居龍蔵に行かせるということは、皆さんご存じのところと思います。

行った結果、鳥居は色丹島で千島アイヌの竪穴住居と、色丹島在住の千島アイヌの人たちの写真を撮り、資料として残します。これは全て東大の所蔵です。この千島アイヌの若者を数人連れて、占守（しゅむしゅ）、幌筵（ぱらむしる）といった、かつて彼らが住んでいた北千島の方に調査に出掛けるのです。

その調査記録を基にして作られたのが、フランス語で書かれた「千島アイヌ」という本なのですが、鳥居龍蔵が集めた資料はほぼ全て、今、民博の方に移管されています。写真に写っている右の竪穴住居模型の写真も民博の資料で、全く同じものを鳥居が図面に残しています。

これは色丹島で撮られた、千島アイヌの人たちが作業をしている風景ですが、おじいさんが作っているのが、先ほどの模型です。色丹島で千島アイヌの人に依頼して作ったということがこれで分かります。女性が着ている服も実は収集されていて民博に残っています。

それから、千島アイヌの資料としては、ハマニンニクという草本植物の茎と葉で編んで



千島アイヌの竪穴住居模型



Fig. 53. Deux femmes faisant des paniers. Un homme faisant un modèle de hutte en terre. Etoupirika.

竪穴住居模型を製作する千島アイヌの男性と家族

作ったバスケットがあります。

また、アイヌ独特のお盆があります。文様が北海道アイヌのものとは全く違って、非常に斬新でモダン化された、ヨーロッパの影響を受けた文様を作っています。他のアイヌとは文化の違う人々という形で鳥居龍蔵も取り上げています。バスケット文化は、北海道アイヌにないことはないのですが、こんなに高度に発達していません。どちらかというバスケット文化は、アリューシャン列島からアメリカの方によく見られる文化といわれているものです。

鳥居龍蔵の日本列島文化形成論というものが、彼が書いた『有史以前乃日本』という本の中に出てきます。それを読み直したところ、鳥居龍蔵自身は、坪井のコロボックル説を完全に否定しているわけではなさそうだということが分かったのです。結局、鳥居龍蔵は自分の千島アイヌの調査から、ある仮説を出しました。

彼はアイヌというものを、第一のアイヌと第二のアイヌという、二つのグループに分けてしまったのです。第一のアイヌはもともと北海道千島の石器時代の遺跡を残した人々で、坪井正五郎が言ったコロボックルとはこの人々を指していたのだろう。それとは別に第二のアイヌなるものが本州にいて、これが縄文土器を残した人々で、彼らが北海道に勢力を拡大していくことによって第一のアイヌたちが千島に押し出され、千島アイヌという形になったのではないかと仮説を出したのです。

実は彼は日本語で書いた千島アイヌの調査の短報に、あるエピソードを残しています。千島アイヌの青年たちを連れて択捉島に寄るのですが、その択捉島でアイヌの女性からコロボックルの伝説を聞くのです。背が低い人たちで、穴に住んでいて、土器を作っているという話をしたら、急に一緒にいた千島アイヌの青年たちが、「それは俺たちのことじゃないか」と言って怒り出したのです。恐らくこういったことが、鳥居龍蔵がこういう考えを持つよう

になった一つの契機だったのかもしれませんが。

それから、これは現在是否定されていますが、鳥居龍蔵はアイヌをヨーロッパ系の人種と見ていた節があります。

鳥居龍蔵は日本人とアイヌとをほとんど切り離して、日本列島のいわゆる現在の日本民族の形成をこういった段階で考えていたということです。

坪井正五郎のコロボックル論争はこの辺りで終わってしまいます。鳥居龍蔵がコロボックルの原型と考えた千島アイヌに関する研究は、その後かなり停滞しますが、九〇年代から急にまた情報が増えます。というのは、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、アメリカ・ロシア・日本の共同調査で北千島の発掘がどんどん進んでいくのです。

その結果、北千島の考古学的なデータと情報が飛躍的にふえます。これは北千島調査のリーダーだった私の友人の Ben Fitzhugh という人が作った北千島における考古学的な編年です。縄文時代が北千島まで及んでいたかどうかは分かりません。今、確実に日本の縄文時代に相当する縄文土器が出てくるのは国後島までです。

そして、次のエピソードは、日本語で続縄文といわれている段階です。この段階になると北千島で拡散します。このエピソードは、どうしてこういうことが起きたのか分かりませんが、北海道中心にして弥生時代に対応する時代として指定されたのですが、続縄文の土器は本州、樺太、千島まで一時期に拡散する時代があるのです。恐らくそれに乗って北千島まで拡散したと考えられます。その遺跡も出るのだそうです。

それがほとんど滅亡寸前まで減った後に現れるのが、オホーツク文化の人たちです。オホーツク文化は樺太に起源を持った文化で、北海道で続縄文から擦文文化が生まれていく過程で、ほぼ同じ時期に北海道のオホーツク海側に樺太から広まってきた文化です。これは、今まで樺太から北海道のオホーツク海岸を経て、知床半島ぐらいいまで止まっていたと思っ

ていたのが、実は国後、択捉を突き抜けて、占守島まで拡大していたことが分かってきました。このオホーツクの時代に占守、幌筈あたりの人口が急増して、かなりの人間が住んでいたことが分かっています。

ところが、オホーツク文化自体は一〇世紀頃を境にして、擦文文化に吸収されるようにして消えていくのですが、千島列島では擦文文化が択捉島ぐらゐまでしか及ばなかったために、ずっと残ります。そして、一三世紀ぐらゐになって急激に人口が減って滅亡していきます。それに代わるようにアイヌ文化が現れてくるという構図になるのだそうです。

千島アイヌと呼ばれる人たちは、かなり特殊なグループとして考えられていたのですが、一八世紀の初期に書かれた千島アイヌに関する民族誌を読み直してみました。これは恐らく、世界最古のアイヌに関する肖像画と思われるものですが、一七七六年に発行されたゲオルギーの『全ロシア民族図誌』という本の中に、クリル人という名前が出てきます。このクリル人はクリル列島、つまり千島列島に住んでいる人ということですが、その描かれている姿はどう見たってアイヌにしか見えません。しかもこれは想像で描かれていないのです。

資料からも分かるとおり、一七四三年以前にロシアの人類学民族学博物館に所蔵されたものですが、ロシア科学アカデミーが収集したとされる千島アイヌの衣装があります。この肖像画は木綿の衣装なのですが、脇が白く描かれています。これは光の加減かと思つたら、千島アイヌの衣服として、紺色の木綿衣の脇に白い木綿の布をマチとして付けた資料が出てくるのです。ですので、この絵が空想で描かれたものではなく、実際に収集された衣服の資料を基にして描かれたものであるということが分かるのです。

そして、千島アイヌは、北海道アイヌとは違う特殊なアイヌではなくて、まさにアイヌそのものであったということも分かってくるのです。



『全ロシア民族図誌』掲載のクリル人（千島アイヌ）

それから、イナウを大量に使います。先ほど、坪井正五郎が日本の削り掛けについて書いていましたが、イナウをこういう形で使うというのもアイヌの一つ大きな特徴です。それから、かんじき、船、そして日本製の漆器類や、明らかに日本から来たと思われる刀の鞘、それからナイフの鞘などを作るのも北海道アイヌと共通しています。

何よりも、習慣が若干書かれています。遠来の客を迎えるときの作法として、海からボートに乗って客が来るときには、海岸縁に出てきて、刀を抜いてそれを上下させながら声を上げるといふ習慣があるのですが、それがロシア側の記録に出ています。

それから、社会の中で何か紛争が起きたときにどういふ解決をするのかというので、ウカルという習俗がアイヌにあったのですが、ロシア側で記録しているのは、間男が発覚した場合です。間男が発覚すると、間男は亭主に対してウカルを申し入れないといけないという習慣があつて、ウカルを申し入れた方がまず背中をこん棒で三回、思い切りぶん殴られるのです。それをお互いにやり合います。

こちらの絵は千島アイヌではなくて、北海道アイヌの様子を描いたものです。蝦夷嶋奇観ですが、これと全く同じことが千島アイヌでも行われているということが、ロシア側の資料から分かるのです。まさに千島列島に住んでいたのはアイヌそのものであることが分かります。

そうすると、鳥居龍蔵が見た第一のアイヌとして、第二のアイヌと区別した、つまり北海道のアイヌと千島アイヌを区別するものはどこから来たのか。歴史をひもといてみると分かるのですが、ここからが重要なことになります。

千島アイヌに対しては、千島アイヌが占守島まで行った段階で既に北海道アイヌとかなり頻繁な交流は続けられてきていました。一七二三年にロシアのコズイレフスキーというコサックの親分が占守島に行くのですが、そこで択捉島からやってきたアイヌに出会っている

のです。この段階で既に択捉島のアイヌは千島アイヌとかなり密接な交流を持っていたことが分かるわけです。択捉島のアイヌは事実上、ほぼ北海道アイヌですので、千島アイヌと北海道アイヌはかなり強い広域な絆で結ばれていたのです。

それが、ロシアが千島列島沿いに進出してきて、日本もクナシリ・メナシの戦いを境にしてアイヌに対する締め付けを強くしていくとともに、千島列島上で日本の勢力とロシアの勢力がぶつかりそうになるわけです。一七九九年に千島列島を幕府が直轄化するのですが、それに際して、一八〇三年に択捉島のアイヌまで含む東蝦夷地のアイヌに対して、得撫島（うるつぷとう）より北に行くことを禁止してしまいます。一八〇五年に羅処和島（らしよわとう）といって、択捉、得撫のさらに北側にある小さな島のアイヌが、択捉島の連中がなかなか来ないからと、択捉島に様子を見に来ます。そうしたら幕府の役人に捕まって留め置かれてしまうのですが、隙を見てさっさと逃げてしまうのです。

それ以降、羅処和島の人間は択捉島に来なくなってしまう。そして択捉の人間も得撫以北に行かなくなってしまうということで、ここで恐らく千島アイヌのアイヌ文化を支えていた、北海道アイヌからの物資がほとんど行かなくなってしまうという時代になります。

ということ、北海道アイヌから切り離された千島アイヌは、生き抜くためにロシア側に頼らざるを得ないということで、ロシア文化あるいはカムチャツカ半島のイテリメンの文化が大量にどんどん入ってきます。このようにして文化の様相がだいぶ変わってくるのです。

確かに竪穴住居や土器というのはあるのですが、日本から漆器が来ないから土器を使わざるを得ないのです。そういうことを考えると、初めから千島アイヌは北海道アイヌと違う連中だったというわけではないということで、コロボツクルの話も、こういった文脈の中に置いてみると、また違った見方がでてくるのではないかと思います。

坪井正五郎はコロボックルを北海道だけではなくて、本州の方まで拡大解釈していたわけです。そういう面では、今の学説から見るとおかしい面が多々あります。ただ、コロボックル説は、間違った説だと言って切り捨てるには、今から見るといろいろなものをいっばい含んでいる論争だったのかなという気がいたします。

私のコメントはここまでにしておきます。

**(司会)** ありがとうございます。

後半は、まずコメントを一とおり頂き、川村さんに思ったことを返していただいた後に全体で話し合うという形にしたいと思います。

では、清水さんの方からコメントを頂きたいと思います。

**清水 昭俊 (AA研フェロー)**

川村さんの本には、坪井という人間の人物像や仕事が微に入り細に入り描かれていて、私は通り一遍の知識しかなかったものですから、非常に勉強になりました。ありがとうございます。ありがとうございました。

新聞の書評にもありますが、本の初めの方に、坪井は人類学者・坪井として知られており、坪井については寺田さんや坂野さんがそれなりに書いてはいるけれども、いずれも人類学の側面から見ている、しかし坪井には、人類学に収れんしない部分にも非常に豊かなところがあるのだということこの本を書いたという趣旨が書いてあります。そのとおりだと思います。でも私は、せつかく広げていただいたフィールドをまた人類学に絞るようで恐縮です。

が、やはり人類学の視点から坪井を見るとときには人類学者として見るわけです。そうすると、この本の面白い部分、読んでいくとすくすく笑えるような話、げたの鼻緒のエピソードやおもちゃの話、あるいは「看板考」の、じかに読んだのではとても理解できないところを非常に細かく背景まで解説していただいて、よく分かるわけです。そういう面白いところをだいたいそぎ落としていかないといけないので、恐縮ですが、人類学の観点から読むことにしました。

これはある種、坪井正五郎の一つの不幸だと思いますが、坪井ばかりではなく、著名な人類学者・文化人類学者に共通の一種の不幸だと思います。梅棹忠夫にしても、石田英一郎や山口昌男も、非常に著名で社会あるいは知識界に対して大きな影響を与えた人ですけれども、与えた影響は必ずしも人類学ばかりではないわけです。人類学の部分を見てみると、そんなに大きくはなくて、人類学から見ると人物像と外から見ると人物像とはだいぶ違っているのです。しかも、著名な人類学者といわれた人たちの人物像を重ねて描ける人類学の姿勢、人類学の方で見る人類学の姿はかなり違うのではないかと感じるはずと持っていました。

坪井が彼と少数の仲間だけで始めた人類学は、坪井人類学と言ってもいいようなものだと思います。これが即、その後の人類学でもないわけです。そうすると、坪井が言った人類学は括弧付きの「人類学」であって、その後の人類学とは切り離して見る必要があるのではないかと思うのです。そこには歴史的な経緯もあるのですが、一つ考えておくべきことは、坪井の時代には、人類学自体が日本だけでなくヨーロッパでも形成過程にあったということです。

今はネット「国立国会図書館デジタルコレクション」で読めるのですが、一九〇二年に出版された『人類学講義』という、坪井の講演を筆記して出版したものがあります。この中から抜き出してみますと、「一八三七年にロンドンにて土人保護会立てられたり」とあります。



「土人保護会」は Aborigines Protection Society に与えた坪井の和名です。それを前身にして、一八四三年にロンドンにて「人種学会起これり」。これがイギリスでは現在につながる学術的な人類学の出発点とされているものです。パリでは中間の一八三八年に「人種学会」が設立されました。これはロンドンの土人保護会と人種学会との中間で、半ば土人保護、半ば学術という組織でした。この辺から学術的な人類学が始まるというわけです。「人種学会」は Ethnological Society の和訳で、坪井は ethnological/ethnology を一貫して「人種学」と訳しました。「現在の意味での「人種」ではなく、坪井にとつて、人類を区分けた細分は、区分けの規準が身体的特徴であれ言語、居住地域その他何であれ、全て「人種」でした。」

イギリスやフランスの動きは、確かに坪井の時代より半世紀ぐらい以前なわけですが、坪井からみたら、わずか五〇年前の出来事です。さらに、彼は割合細かくこの時期の人類学の歴史を追い掛けています。人類学教授といえるものがパリに置かれたのが一八六三年で、だんだん各国にも人類学会ができ、日本に人類学会ができたのが一八八四年（明治一七）年です。留学から帰つてすぐに、一八九二（明治二五）年ですが、坪井は東京帝国大学の人類学教授に就任し、それがつまり日本で最初の人類学教授です。ところがイギリスではオックスフォードでタイラーが人類学の講師になったのは一八九六年であり、実際に大学で人類学の研究教育が組織的に始まることは一九世紀にはまだなくて、二〇世紀に入ってから一九〇〇年代です。確かフレイザーが大学教授になったのは一九〇六年ぐらいです。そして一九〇〇年代になって初めて、それぞれの大学に個別の学科が置かれるようになります。坪井は留学先のイギリスでこの大学にも所属せず、学ぶべき師もいなかったという事情を川村さんは描いておられますが、実際に人類学を学べる大学があったかといえば、ほとんどなかった時代です。そういう意味で、日本とは数十年の差異はありますが、坪井が行ったときには、ほぼ追いついている、あるいは同時代と思えるぐらいの学術的な状況であったのです。

坪井自身は留学に先だつて人類学会を作っていました。そのときには古物遺跡風俗方言人種と、非常に多岐にわたる古物趣味から出発した趣味的な関心を博物学的な視野で広げていったわけです。坪井は実際にほとんどその全てについて、石器土器などの採集品出土品、日本人の土俗、アイヌ風俗、風俗漸化、あるいは留学から帰ってきた直後には休息するときには片足にて立つ習慣やタブーなど、非常に多岐にたるテーマを追求しました。坪井にとつてはこれが全て人類学だったのだらうと思います。ただ、それを学術的なスタイルで体系化しようとする、そこに体系的な枠組みが必要です。そこで彼が最初に人類学の講義を担当したときに、川村さんの本では一七〇ページに書いてある図のような枠組みを作りました。総論から始めて、本論、結論に至るものです。

総論の部分は、人類学の定義や人類学の構成、人類とは何かという人類総論です。真ん中の本論では先ず事実に関する経験的な研究があつて、それは現在の事実と過去の事実であり、現在の事実は人類学と土俗学、過去の事実が考古学という個別の専門分野になっていきます。それを受けて本論の理論編では、人類の進化、出現に関する諸項目の研究を扱うという大きな枠組みを作ります。彼は帰国直後の一八九三（明治二六）年にこの枠組みを書き、ほぼ終生、これと変わらない枠組みを維持したと思います。ただし、彼は多様な聴衆を相手に人類学を啓発しましたので、晩年には、約一〇年後の『人類学講義』の口述筆記がその一例ですが、この枠組みから選択して、人類本質論「先の枠組みの中の人類総論」、次に人類の分類「人種学と土俗学」を主に述べる人類現狀論、最後に「考古学と進化を合わせて」人類由来論を述べるという講演スタイルに落ち着きました。

坪井はイギリス留学中には、イギリスには見るべき理論はほとんどないと言っていたのですが、彼が構想した人類学は、やはり基本的にはその当時の人類学、例えばタイラーなどの人類学から学んで、彼なりにつくりあげた理論体系をずっと維持したのではないかと

というのが、私の坪井の人類学に対する理解です。後の時代の人類学者の類型でいえば、field anthropologistあるいはtrained anthropologistではなくて、armchair anthropologistだつたという評価になると思います。

そういう坪井の人類学の特徴を比較的よく表しているのがコロボックル論争ですが、坪井の位置は、コロボックル論争で坪井の議論が追い詰められていくプロセスによく表れていると思うのです。今から考えると、坪井のコロボックルの議論を理解するときに、それを理論として受け取るよりは、彼の学会や周囲の人々に対する影響という観点で読んだらよいのではないかと思えます。

彼は一方で、石器時代の先住民はコロボックルだという言い方をする過程で、それに対する反論を呼び起こします。その代表が小金井良精と鳥居龍藏です。坪井の議論の中には、身体的な要素、石器、慣習、口碑などさまざまなものが含まれています。それでも、坪井の議論を追い詰めた一つは、小金井良精の体質人類学（形質人類学、自然人類学）、とりわけ身体計測のデータです。彼はアイヌ人の脛骨と石器時代の遺跡から出てくる脛骨がともに前後に細長い形をした扁平脛骨だと言っています。これはその後の研究によると先住民、特に採取狩猟民に特徴的なものだそうです。石器時代人の脛骨はアイヌのものと同様一致し、日本人のものとは一致しない。そこで彼は体質人類学のデータを積み上げて坪井の議論を批判したのです。要するに小金井は、専門的な体質人類学を人類学の議論に導入したわけでした。それを小金井良精がなぜできたかという点、彼は解剖学の教授であつて、自然科学の論理で立論するバックグラウンドを持っていたからです。これに対して坪井は同じ土俵ではとても太刀打ちできないわけで、鳥居龍藏に言わせると、坪井先生は体質人類学が苦手だった。体質人類学を自分の専門としては推進できなかったわけではあります。

その後、その鳥居が坪井を土俗学の方で追い詰めていきます。ちなみに、坪井と鳥居の用

語では、ethnographyは「土俗学」でした。坪井の説によれば、コロボツクルはアイヌより先にいた先住民であって、竪穴に住んでいて、土器を作っていたということです。ところがアイヌは竪穴の住居に住まないし、土器も作らない。それから、石器時代人は、この時期、モースの議論を受けて、食人の風俗があつたとされています。ところがアイヌには食人の風俗はない。だから日本の石器時代人はアイヌではないというので、それよりも先のアイヌの口碑が伝える先人であるコロボツクルであるとしたのが坪井のコロボツクル説なわけですが、それに対して鳥居は千島アイヌを調査しているのです。千島アイヌは竪穴に住んでいる。土器も作っている。要するにアイヌといっても、竪穴とは無縁ではないし、土器とも無縁ではない。鳥居は、自分の説が論拠の一つになって坪井先生のコロボツクル説は覆つたと捉えているわけです。言い換えると、鳥居は坪井に対して、土俗学（エスノグラフィ）、あるいは人種学（エスノロジー）の実地調査によって経験的な知識を積み上げることによって坪井を追い詰め、結局、坪井の説は成り立たなくなっていくわけです。

坪井は、小金井との関係では体質人類学を自分ではやりませんでした。坪井にもさまざまな調査をするチャンスがあり、彼は実際、考古学の方では日本国内で熱心に実地に出掛けます。また、海外で日本が新しく植民地を獲得したとき、あるいは海外での調査が可能になったときに、東京帝国大学の人類学教室にも実地調査の要請が来るのですが、それをみんな鳥居に振るわけです。鳥居の方はその当時はまだ標本整理係みたいなもので、学者でも何でもない、教室のただの雇い人に過ぎなかつたのですが、熱心に自分から行きたいと言ってチャンスをつかみ、出掛けていきました。今から見ると非常に短期間ですが、台湾の紅頭嶼や遼東半島にも行きましたし、西南中国のミャオ族の調査をするなど、着々と土俗誌スタイル、民族誌スタイルの報告を積み重ねていきます。

坪井のなき後の人類学がどうなっていくかということ、人類学教室では専門的な人材を組織

的に養成する教科の制度を持っていなかったので、半分独学の人たちを雇人として採用していくのですが、その中から鳥居が土俗学の部分を継承します。坪井が育てたもう一人が松村瞭ですが、この人は小金井の元で学びながら、日本国内の身体的な特徴の地域差に着目して統計的な調査研究を行い、体質人類学の分野で学位を取ります。人類学教室の系譜でいうと、坪井の次に鳥居が講師になり、やがて助教授になります。坪井が亡くなった後、鳥居が教室の主任になるのですが、松村瞭との間に確執があったといわれていて、結局、鳥居は自ら辞任してしまいます。そうすると人類学教室で土俗学、人種学をやる人がほとんどいなくなるわけです。鳥居が出た後、松村瞭が助教授ながら人類学教室を担いますが、松村瞭が若くして亡くなった後は、教室を継ぐ人がおらず、東北大学から体質人類学の専門家である長谷部言人を呼んできます。

東京帝国大学の最初の人類学教室、これは東京人類学会と双子のような組織ですが、ここには坪井の時代には幅広い内容の広がりがありました。坪井自身はその中で考古学の方を選んでいったと思うのですが、専門的な研究が振興して、体質人類学と土俗人類学と考古学とが分化していく中で、結局、人類学教室では体質人類学が生き残ります。考古学は、坪井の時代に既に彼が関与して学会を作っていました。坪井の時代には人類学教室でもまだ考古学が盛んに行われていましたが、坪井後になると分離していきます。人類学教室の歴史からいうと、坪井の幅の広い人類学から、最終的には体質人類学にやせ細っていくという系譜があるわけです。

この後、「土俗学」や「人種学」というような、今では聞き慣れない言葉がこの時代には盛んに出てきます。それをざっと追い掛けておきます。

坪井の人類学から体質人類学と考古学を除くと、その残りが人種学と土俗学になります。これは系譜からいうと、鳥居の時代に「人種学」という名前で研究が深化していきます。皮

肉なことですが、坪井のフランス・イギリス留学中に、東京人類学会の雑誌には、その当時は調査を「取り調べ」という言い方をしていましたが、土俗誌スタイル、民族誌スタイルの取り調べ報告も出現していました。それは田代安定という、後に台湾にも行き、九州でも調査をし、伊能嘉矩と台湾人類学会を作ったりする人が、短い論文ながら、太平洋に日本の軍艦に乗っていき、現地でサモアを中心に観察して、彼なりに記述するわけです。ヨーロッパにいる坪井には、その間にも日本から人類学雑誌が送られてきて、田代安定についても、こういうことを書いているが違うのではないか、ここがはっきりしないからもう少し詳しく書いてくれなど、非常に細部にわたるコメントをします。しかし、田代安定が現地に行つて、衣食住と若干の儀礼のことに過ぎないのですが、それでも、ある島について観察したことを丸ごと全体的な視野で描くという新しい記述スタイルをここで実現していることについては全く触れていないのです。

後に坪井は日本国内の各地の郷土誌(史)家を集めて土俗会というものを七回ほど開きます。これは鳥居が事務を担当して、七〇〜八〇人が一堂に会して各地のフォークロア、民俗慣習を報告しあうのですが、このときは坪井が、例えば正月習俗、あるいは贈答品が各地でどうであるかといった特定のテーマを出して、それに沿って各地から報告するという、後に柳田国男が雑誌でしきりにやるようなやり方をしました。同じ土俗といっても、坪井が考えるのは、テーマごとに各地からデータを集めることで、鳥居あるいは田代安定が始めたスタイルは、ある一か所の風俗土俗を丸ごと総当たりで観察するという実地調査による民族誌のスタイルで、かなり坪井とは違っていたわけです。坪井の中には、実地調査に基づいて観察したことを丸ごと記述するという発想はほとんどなかったように思われます。ただ、実地調査については、坪井は考古学の分野で、発掘したり表面採集したりしたものを報告するということではずっと綿密にやっていました。そういう意味で、考古学に対しては坪井は非常に

大きな影響を与えたと思うのですが、土俗や人種学の方ではそれほど大きな影響を与えたとは思えません。

坪井が亡くなった後、鳥居が人類学教室の主任になって、人種学という名前では自分は考え方・知識を総合しようとする努力はします。でも、鳥居も人類学教室から離れると、それほど多方面には仕事ができなくなると、彼もその後は考古学に戻っていき、最後の自伝は、副題に考古学という名前を入れるようになってしまふのです。

鳥居の人種学に代わって登場したのが民族学です。第一次大戦後、坪井も亡くなった後になります。柳田国男が発刊した雑誌『民族』に岡正雄がエスノロジーを「民族学」という名前で紹介し、この雑誌を通して「民族学」という名称が日本の当時の研究者の間に広がっていきます。この時期に民族学に参加した人たちは、理科系ではなくて文科系の文学部の本科で学んだ人たちです。それ以前は人類学にしろ人種学にしろ、大学でも選科という、今でいえば聴講生に近い形で学んだり、全く大学で教育を受けていなかったりという人たちも多く含んでいて、かなり素人的な要素を残していたと思いますが、民族学の時代になって、戦間期の第一次大戦後、文科系の教官や学生がしきりにヨーロッパの同時代の人類学から学んで、それを宗教学や社会学の専門誌で紹介するという活動を始めていきます。民族学の専門的訓練を受けたわけではないのですが、宗教学なり社会学なり英文学、あるいは歴史学の大学教育を受けた人たちが、自分自身の関心を拡張して民族学に出ていき、その拡張した部分をまとめるようにして日本民族学会が一九三四年に成立していくことになります。

日本における人類学と民族学、それは現在では文化人類学になっていくわけですが、その歴史をずっと見ていくと、山口さんの言い方では、一種の敗者の精神史になるというか、敗者とまでは言わなくても、正統ではない外側、私は在野というのが適当思うのですが、大学に正規の研究部門としての拠点を与えられて、そこを中心にして育っていったというより

は、外側の在野の人たち、あるいは周辺の人たちが、新しい人間をリクルートしながら、関心を拡げて、現在の文化人類学につながってきた。こんな歴史を繰り返してきて、いまでも在野の性格を色濃く維持しています。現在も日本の大学には民族学科、文化人類学科を名乗る学科はありません。せいぜい文化人類学専門の先生がそれぞれの大学に二〜三人いる程度です。三人の人数でも集まると学科を名乗れて講座を作れるのですが、別々の学科やコースに分散していて、文化人類学科を作れていない。唯一、文化人類学という看板を掲げているのが学会です。その学会は民間の団体で有志の集まりですから、制度的に保障があるわけはありません。そういう意味で、日本ではいまだに一貫して人類学・民族学は在野の学問ではないかというのが私の認識です。

(司会) ありがとうございます。大変詳細なレジユメを作っていただきましたので、後ほど時間があるときに補足いただければと思います。

それでは関雄二さんにコメントを頂きたいと思います。

## 関 雄二(国立民族学博物館)

私自身は、東大の博物館にいたときから、人類学教室に残されていた坪井の写真や辞令の文書などを貸し出す係のすぐそばにいたので、坪井には親近感があったのですが、ここまで詳しくは存じませんでした。真島さんから、考古学的な観点から読んでくれないかという話がありました。これが非常に難しかったです。この本を全部読ませていただいたとき、ものすごい分量であるというだけでなく、どのようにして坪井の考古学を捉えたらいいのだら

うかと迷ったため、時間がかかりました。今日は、視点を定めて、その後それを検証するところまで行きかかったのですが、中途半端な形で終わると思います。

第一に、坪井のこの本を読ませていただいた後の雑感ですが、学問の黎明期にありがちな研究者、在野の区別がなく、非常に開放的な学問環境にあったと思えました。人類学そのものがそうであったし、考古学的観点から見てもそうです。専門性や権威に縛られて閉鎖的でない空間は、現代の私たちが目指そうとしているパブリック・アーケオロジーが目指すものと共鳴があります。最近いわれているパブリック・アーケオロジーはイギリスで始まった概念ですが、イギリスは日本と違って数段進んでおり、一般の人たちが別に学会に属さなくても発掘できるような状況になります。日本はとんでもなくて、考古学協会に所属していないと日本で発掘はできません。私は三十何年間考古学をやっていますが、日本の考古学協会に所属していないので、日本では発掘はできないのです。日本は閉鎖的なのですが、それがイギリスではどんどん進んでいて、ある種、そういうものが日本にもあったのだと感じさせるような本でした。

また、考古学、人類学においても当時は黎明期でした。坪井の時代は、例えば中国の陶器が日本で出てきたならば、日本のその遺跡はその中国の陶器の年代とほぼ同じであると類推してつなげていく比較年代学、あるいは、土器の器の形がどう変化していくか、そのタイプが地域によってどう違うのかという型式学が導入される前の時代です。型式学は坪井の後の鳥居、さらにその後の鳥居の弟子である山内清男などが確立していくわけです。方法論が非常に未熟な時代であっただけに、発見されたものを単独でかつ類推するというインスピレーションを多用していた時代で、見ただけで、ぱっと自分の知識と結び付けるといふ、いい時代だったなと思われます。言ってみれば、自分で抱えているものがないとインスピレーションが湧かないという時代でもあったので、その意味では、坪井の博学的な知識は大変進んで



いたのだと思います。

一方、考古学的手法から見ると、坪井のフィールドワークは雑だという気がしました。例えば人類学会創立記念の「遠足」です。これは一九〇四年のことで、海外では既に比較年代学あるいは型式学が相当進み始めていました。にもかかわらず「遠足」は、みんなが寄つてたかつてやるという、ヨーロッパでいえば一九世紀の半ばぐらいのやり方なのです。それを無邪気にやっているところから見ると、坪井が考古学を人類学の枠組みの中に持ってきたという点は優れているとは思いますが、考古学的方法論的な進展から見ると雑で、あまり新しい流れを考慮していないという印象を受けました。これがざっとした最初の印象です。

次に視点に関して、坪井が持っていた考古学的な歴史認識を挙げたいと思います。コロボツクル説のところでもいろいろと議論が出ていますが、日本列島にどういふ人が住み始めたかということに関して、ちょうど坪井の時代からいろいろなことが言われ始めたのです。坪井自身が間接的な師匠と言っていたのでしょうか、考古学の祖といわれているエドワード・モースは一八七九年に大森貝塚を掘り、成果を発表しました。近代的な考古学的手法を取り入れて調査・分析したわけです。モースが取り入れた概念は、石器（旧石器・新石器）、青銅器、鉄器という三時代区分でした。モースは、大森貝塚はこのうちの新石器に当たり、これはアイヌ以前だと言っています。

一方、ハインリッヒ・フォン・シーボルトが同じ年に貝塚の調査をし、貝塚は石器時代に当たりますが、これはアイヌだという対立した説を出すのです。ちょうどこういう研究があった頃、坪井のコロボツクル説が出てきます。

どれが正しいという話ではなくて、視点ということからするならば、モースにしても、シーボルトにしても、あるいはコロボツクル説を出した坪井にしても、そうではないという小金井にしても、石器時代人、石器を作った人々が日本列島における先住民族であるという

認識はあったのです。しかも、現在の日本人とは系統が違うという認識に立っていました。つまり、日本民族が後で先住民族を駆逐したという考え方です。ですので、日本列島には石器時代はあるけれども、日本人には石器時代がなかったという考え方がいずれにも共通しているのだと思います。

これを壊したのが鳥居です。アイヌの調査をすることによって、師匠のコロボックル説を真つ向からではなくてやんわりと否定しながら、石器Ⅱ縄文Ⅱアイヌという形で、日本人と石器時代を結び付け始めていくわけです。しかしそれ以前の坪井までは、石器時代ははつきりと分けていたのだと思います。

この石器時代の人々として、アイヌであろうが、プレ・アイヌであろうが、コロボックルであろうが、どの人を想定するにせよ、石器時代があったということを導入したことは、当時の世界の考古学の主流からするならば、人類史という枠組みの中に日本の過去を組み込んだことには間違いないと思います。ある種、考古学の近代化という学術的なことを坪井はやったのだと思います。

一方で、すでに述べましたように、石器時代を担った集団が誰であったかということに関しては、現日本人、あるいはその後現れる日本人と切り離しました。このことは、先住民と日本人の交代を前提とする例の神話的な歴史観と融和的であったと思います。モースは記紀に依拠したと言われていますし、モースの頭には、米国にヨーロッパ人がやってきてネイティブ・アメリカンを駆逐したというモデルがあった可能性もあるということも最近では指摘されています。坪井自身はあまり日本人起源論に近寄らなかったのですが、幾つかの論考の中で、混血という考え方を出します。これは大東亜共栄圏と重なってくるのだという考え方もありますが、いずれにせよ、現日本人はアイヌあるいは朝鮮のような人たちのある種混血であるという言い方をしています。

それがやがて坪井以降になってくると、鳥居をはじめとして、石器時代人ということにも日本人を組み込んでいくわけです。鳥居などは固有日本人という言葉を使っています。そしてアイヌまで、あるいは朝鮮をもう少し古いところに持つてくるという動きに変わってきます。いずれにせよ坪井の時代は、石器時代とその後が断絶しているという考え方だと思っています。坪井と小金井によるアイヌ・コロボツクル論争も、断絶的過去という捉え方をしている点では一緒であろうと思います。

日本考古学に関しては、川村さんも指摘されている、八木熒三郎の書いた『日本考古学』という本があります。そこに、坪井正五郎校閲という言葉が大きな字で書かれています。本は八木が書いたのですが、校閲しているわけですから、一応坪井が認めた歴史観であるとすると、そこに表れているのが、先史時代、原始時代、有史時代という大区分です。このうち先史時代は石器時代に当たり、原始時代が古墳時代であると八木での本ではされています。この先史時代という用語は、坪井が一八八九年頃に「東京人類学雑誌」の中で記して、以後、普及を図った用語ですが、プレヒストリーという言葉自体はもちろんヨーロッパで既に使われていました。八木が言う先史・原始・有史は、ヨーロッパ考古学で当時主流であった石器・青銅器・鉄器という技術変遷史的な考え方を超越した、日本独自の編年観だったと考えることもできると思います。しかも、先史と原始の関係性は乏しいということは、八木の本の中にも書かれています。つまり、先史を切り離れた点では坪井の歴史観と同類と見てよい、だからこそ校閲したのだろうといわれるわけです。

ここまで考えて、次に調べたかったのが、ヨーロッパの当時の考古学などでは、こういった時代観がどうだったのか、それが坪井の時代観とどう関係してきたのだろうかということ。考古学史の本によると、当時、ヨーロッパにおける三時代は、石器・青銅器・鉄器というものでしたが、その源はイギリスでもフランスでもなく、なんとデンマークの考古学

だったのです。デンマークで、しかも考古学者ではない人が、コインの分類から物の分類に興味を持ち、博物館に入って所蔵品を分類している中で、この技術変遷史を思いつき、デンマーク語で入門書を書くわけですが、一九世紀の半ばにこれが英訳されて、瞬く間にイギリスとフランスに影響を及ぼします。この三時代をヘロドトスのような古典資料の中で考える、あるいは、神が人類を紀元前四千何百年に創った、もしくはよく言われるように紀元前六〇〇〇年に創り始めたというように聖書考古学の枠の中で位置付けようという時代の雰囲気があったわけです。ちょうど坪井が留学した頃もこの問題が取りざたされていました。

また、第十六章で諏訪湖の杭上家屋の話に関してマンローの話が出ていますが、実はスイスのチューリッヒ湖畔でケラーという好事家が発掘して、ケラーの場合はニューギニアの例を引いていますが、ちょうど同じように湖上に人々が暮らしていたのではないかと説が出ます。この説は坪井がヨーロッパに行った頃に一般的な情報として広まっていました。先ほどの三時代のうちの最初の時代である石器時代の後半に杭上家屋の人たちが暮らしていたのではないかという考え方が、既に一九世紀の半ばぐらいにあったのです。

それよりも前の一九世紀の初めの頃に、フランスのソンヌ川のほとりで、今でいう旧石器の石器が見つかるのですが、絶滅した動物と一緒に出るのです、かなり古いということがいわれています。しかしこういうものと石器時代が終わった後で有史時代に入るローマ帝国の時代のギャップがヨーロッパでは当時大きくて、その間をつなぐものが欲しかったのです。スイスの発掘は、ちょうどその間をつなぐものとして位置付けられて、ヨーロッパの中ではようやく人類史の石器時代というものが捉えられようとしていた時代、これこそ坪井が留学していた頃の時代観だったと思います。

いずれにせよ、大事なのは古典資料や聖書考古学がかなりまだ強かった時代に、ヨーロッパの中でも時代観がつかまれてきたということです。先ほどの坪井の歴史観、石器時代が今

日ある日本人とつながりが断絶しているのは、記紀史観との折り合いが良かったという点はもちろんあるわけですが、それを信じて意図的に推進しようとしていたかという点、それは違うだろうと思います。これは川村さんも書かれていますとおりです。坪井自身、日本人の起源というテーマに距離をかなり置いていて、そのほとんどは複数の分子の混同からきたというような混合説を出していますけれども、形成過程そのものは漠然としていて、それに関する詳しい情報がある書き物は少ないと思います。

ここで、先ほどのヨーロッパの考古学の流れと合わせてみると、なぜ記紀史観のようなものを導入してきたのか。ここが実は私にとってもまだ分からない部分です。一つは、古典や聖書に依拠していたようなヨーロッパ考古学の流れをそのまま享受していたのかもしれない。つまり、方法的に当時のヨーロッパの考古学では、古代あるいは石器時代というものを考えたときに、それを考える材料は聖書あるいは古典という文献であったということからすると、日本で考えた場合、それが記紀神話に当たるのではないか。そう考えてみるとつきりいくのかなというのが勝手な思いです。

結論として、石器時代との断絶という坪井の歴史観は、ある種、ヨーロッパ的な手法を導入したことで、実際はヨーロッパでは断絶しておらず、聖書考古学の中で、歴史的な連続性の中でやっているわけですが、日本の場合は記紀に入れたことによって、先住民族を追放しながら新しい日本人が成立するような考え方にいつてしまったのかもしれない。あるいは、そこまでヨーロッパ的手法を意識せずに、それを先取りしていた先人の外国人研究者の説をそのまま受け入れたのかもしれない。この辺は検証してみないと分からないというのが今の段階です。

それから、冒頭で申し上げましたが、かなり考古学的な手法が発達していたにもかかわらず、一九〇〇年代になってもアナクロリクナ方法に頼っていたのはなぜなのだろうか。こ

の辺は、八木契三郎と最終的に決別するという話もどこかで読んだ記憶があるのですが、日本考古学との関係を少し考えないといけません。日本考古学はこの後、手法が精緻化されてきます。そういうことに対して、坪井はあまり面白く思っていなかったのかもしれないという気がします。

面白い例があつて、一九一二年に坪井が、今日の仁徳陵の陪塚とされる塚廻古墳を調査するのですが、この発掘に参加した大阪朝日新聞の記者がこの発掘のことを記事にすると、同じ東大の国史教室の黒板勝美がけしからんという文章を考古学雑誌に載せます。黒板は国史教室だからかと思つてよく読むと、確かに天皇陵の陪塚だから、そこを掘るのは大不敬罪である、あるいは祖先崇拜を無視した行為であるということも二〜三行書かれています。ほとんどの文章が、これによつて学術的価値の確保がなされなくなる、有象無象の素人が掘つてどうするのだという批判でした。そういうことを国史の人に言われてしまうのです。そんな乱暴な発掘を坪井が平気で一九一二年の段階でしているということは、この頃、ヨーロッパなどで進んでいた方法論のようなものあまり関心を持っていなかったことをうかがわせる出来事だと思えます。

疑問として提起したかったのは、これはなぜなのだろうかということ。この頃から、日本考古学と決別をし始めたからなのか、あるいは日本考古学がまだその段階にまで至っていなかったのか、坪井におんぶにだつこの状態だったのか。これは今後も調べてみると分からないという気がいたしました。

坪井の世界観というか時代観がどこから出てきているのか。留学中あるいは読んだヨーロッパの考古学の手法から来ているのか、あるいは既に働いていた先人外国人の影響か。あるいは、その後、既に進んでいることから次第に興味を失っていくように見える、しかし相変わらず発掘などをやっている坪井の態度は何なのだろうかということ疑問に思いま

した。

これだけのことを、一冊の本を読んで想像させていただいたというのは私にとって大変有益な材料になりました。感謝したいと思っております。

(司会) ありがとうございます。最後に山路さんの方からコメントを頂きたいと思えます。

### 山路 勝彦 (関西学院大学)

私は坪井正五郎の中でも、特に「人類館事件」との関わりを見ていきたいと思えます。

この人類館事件は、明治三六年に大阪で行われた第五回内国勸業博覧会の余興と関わってくるのですが、この余興がどういうものであったのか、坪井がどのように関わったのかというのを議論してみたいと思えます。

この件に関しては、今までに多くの論文や本まで出ています。そして、『日本経済新聞』の記事で川村邦光が坪井を批判して、この人間展示を企画した発起人であるというようなことを書いていますが（『日本経済新聞』二〇一三年一月二四日）、これが一般的通念ではないかと思えます。しかし、私はこれに対して真逆の考え方を持っています。関わってはいるのですが、一体全体どのように関わっていったのだろうか。これは非常に複雑なプロセスがあつて、一筋縄ではいきません。第一に、当時、明治三〇〜四〇年代の日本人が持っていた沖縄やアイヌに対する見方とも関わってくるので、スライドをお見せしながら博覧会の模様を見ていきたいと思えます。

この人類館は結論から言うと、坪井が企画したのではないのです。まず、西田正俊という人が計画しました。この人は相当なやり手のようで、府会議員まで務めたこともある商人です。そして、この人が仲間の山田仁三郎を誘って、シンガポールで人を集めさせました。そして集められたのがインド人、マレー人などです。それから問題になったのは沖縄の女性で、二人来ました。この沖縄の女性が展示されたということで、『琉球新報』が問題にしたのです。太田朝敷というジャーナリストが、人権蹂躪だということで新聞に書き出しました。現在はこの議論が基本になっていて、沖縄女性に対する差別だということが言われています。

ところが当時のデータを調べてみれば、実際はそうではないわけです。この沖縄女性には実には辻の遊郭で娼婦をしていました。情夫がこの博覧会場の売店で働いていて、それを頼ってきたのです。二〜三カ月いて、二四二円ぐらい手当をもらっています。当時の肉体労働者の日当が四〇銭で、マッチづくりの女工の日当も四〇銭ぐらいだったのです。だから、どんなに働いても一カ月一〇円ぐらいです。そのときに二百幾らもらおうというのは、いろいろな魂胆があったと思わなければいけません。

そして、人類館は入場料を一〇銭取るのです。最盛期には何千人と来たといいます。一日一〇〇〇人来たとしても一〇〇円ですので、三カ月間で三〇〇〇円ぐらいです。その当時の肉体労働者の賃金と比べて考えてみるとどうなのか、あるいは、沖縄女性がどのくらいのお金を稼いでいたのか。そういう状況を積み重ねていくと、今まで言われてきていることがどうも怪しいのではないかということです。

シンガポールの日本旅館でボーイをしていたインド人が人類館に出演していて、そのインタビュアーに応じた新聞記事を見ると、「ミィ、フィール、カイト、コムホータボ」という発言があります。この記事はうそではないと思うのですが、連れてきて展示されているとわれ



われは思うけれども、彼らはみんな金もうけで来ていたのではないかということです。

こんなことを企画したのは西田正俊だと先ほど言いましたが、もう一つ言うべきことがあるのです。昔、神戸市の和田岬に水族館がありました。その水族館を造ったのは、東京帝大にいた有名な水産学者で、「日本の水族館の父」と言われている人です。その教授があちこちに水族館を造ったときに、神戸の水族館も造りました。そして、この神戸の水族館にアイヌの人が働きにきていたのです。そのアイヌの人が博覧会のアイヌ展示に非常に深く関わっていたとされています。

もう一つ付け加えると、中村土徳という、『東京人類学雑誌』にも名前が出てくる若者がいて、明治三六年当時、アイヌ研究を志していました。そして研究会を開いていて、コロポックルの話やアイヌに関するいろいろな幻灯をここで映し出していました。ですから、この神戸の水族館はアイヌ研究の一つの拠点でもあったわけです。ここにアイヌの人がやってきて働いていて、それが仲間を日高地方から呼んできて、人類館のアイヌセクションが出来上がっていったわけです。

なぜそんなふうになっているのかというと、この頃、アイヌの演芸が東京や大阪その他いろいろなところで広く行われていたのです。誰が組織したかは分からないのですが、劇団がいろいろなところでやっていたわけです。

こうして、大げさに言えば日本各地にアイヌブームのようなものがあって、それがセットになって人類館が出来上がっていたのではないか。沖縄の場合、アイヌの場合、インド人の場合、いろいろとケースは違うのですが、このような時代背景があります。

以下、スライドをご覧ください。

【図版〇〇一】

これは大阪の地図です。左上に淀川が走っています。黒いところが中心部です。その中心部の南の方、今は天王寺公園と呼んでいますが、そこが博覧会場だったのです。阿倍野ハルカスの近くです。右下が会場です。この地図は明治三六年のもので、荒地地みtainところを開拓して博覧会場を造るのです。その上（東隣）に茶臼山があります。これは大阪夏の陣で真田幸村が討ち死にしたことで有名な古戦場です。そして、住友吉左衛門という住友財閥のトップがここに別荘を持つていたのです。なぜこの話をするかというと、この博覧会は住友財閥が影で動いていたのだからというのが私の推測です。徳大寺家生まれの住友吉左衛門は養子で入ってきたのですが、実の兄さんが西園寺公望で、数年後に日本の総理大臣になりました。住友は当時貴族院議員だったわけです。そして、住友財閥を率いていました。このように資本主義の発達史上で位置づけていくべきなのだろうと思います。

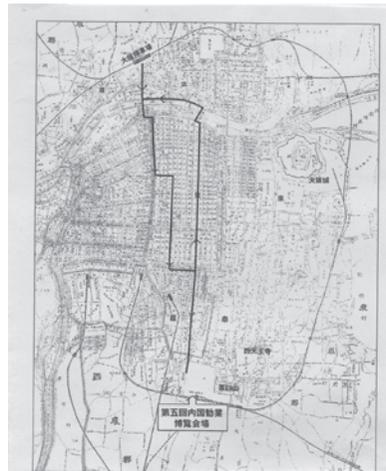
【図版〇〇二】

次が茶臼山周辺の地図（明治五年）です。だんだん整備されていくのですけれども、これは博覧会のかかり前です。整地されてできたのが博覧会場です。

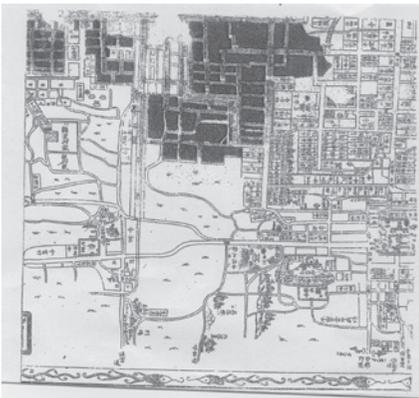
【図版〇〇三】

左上の方に正門と書いてありますが、その正門を入ると会場があります。正門の前は、正式には博覧会場ではありません。ここ（正面の外）に人類館があったのです。そして、付近

【図版〇〇一】



【図版〇〇二】



にいろいろな見せ物小屋があつて、つぶれたり何かしたりして評判が良くなかつたのです。その一角にこの人類館が造られました。いろいろな県別の売店があり、沖縄県の店もこのどこかにあるのです。そこに件の情夫がいたということです。

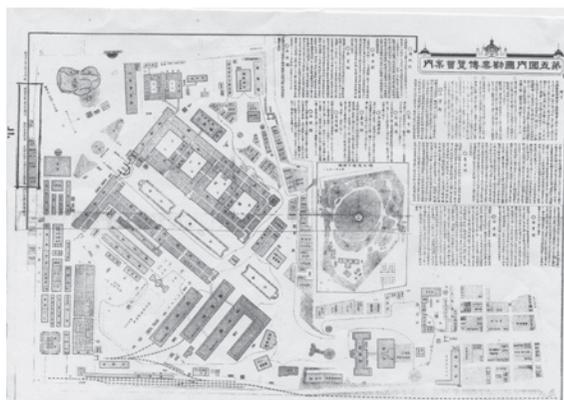
【図版〇〇四】

これが博覧会場正面の光景です。これが裏側の光景です。

【図版〇〇五】

実はこのとき、天皇が行幸するのです。京都に泊まつて、梅田まで来て、梅田から馬車に乗つて博覧会場に来るわけです。当時は大阪はまだごちゃごちゃしていて、日本橋の長町、今でいう「でんでんタウン」は日本の代表的な貧民窟の一つだったので。そこを天皇が通るわけです。大阪北区の区役所は非常に気を配つたということですが、天皇が来るときに、工場はのろしを上げろ、鉄船舶は汽笛を鳴らせ、お寺は鐘を打て、とお触れを出します。では清国人はどうするかと思ったら、爆竹を鳴らせということです。つまりこの頃は、われわれが思っているほどの民族差別はなかつたのではないか、むしろそれぞれの文化を認めようという雰囲気があつたのではないかと思うわけです。爆竹を鳴らすのは今では考えられないことでしょう。今ではヘイトスピーチがこの近くで行われていることを考えると、雲泥の差があります。

【図版〇〇三】



【図版〇〇四】





【図版〇一〇】

これがアイヌセクションです。このような狭いところに押し込められています。なぜこういうことが出現したかについて、これから触れます。

【図版〇一一】

これが『北海道土人風俗画』で、博覧会正門を背景にしています。ここに標題として人類館と書いてあります。大きなA四版ぐらいの封筒状の中に九枚の写真があるのです。

【図版〇一二】

この写真集は誰が作ったかということです。いろいろと説明があり、英文の説明もあります。ということは、かなりのインテリが作ったということです。

こういう写真が当時発行されていました。アイヌということで曲解するような写真もあるのですが、他はお祭りの光景です。祭事関係の写真が多いのです。

これはイナウでしょうか。アイヌの風俗・習慣をこういう形で表現しています。英文で書いてあったりします。私の推測では、今までの状況証拠を突き進めていくと、神戸の水族館で中村士徳とアイヌの人が共同でこういう写真画像を作ったのではないか。その協力で人類館が設立されたのでしょうか。一方では、沖縄女性のように金もうけでやってくるのもいた。その金もうけだけに焦点を合わせると、やれ人権蹂躪などと非難的になりますが、実は複雑な世界であったのだと思います。

【図版〇〇七】



【図版〇〇八】



【図版〇一三】

これが人類館の広告です。なぜ人類館を開設したのか理由が書かれています。北海道アイヌの家屋を移し、学術的に利用したいとか書いてありますが、坪井正五郎が書いたのであると思います。前にもパリ万博で植民地の展示を見ていたわけで、これを日本でもやったらいいのだろうかということを考えていたとは思いますが。「北海道アイヌの家屋を移し、これに土人を住居せしめ、太古の遺風の風俗知らしめ、もって学術の師となす」と書かれています。しかしながら、これを最初に考えたのは、実は日本の水族館の父といわれる飯島魁です。飯島はその後にすぐヨーロッパに行ってしまうのです。それで話が中断してしまいましたが、その後、偶然にも西田が出てきます。西田は、府会議員でもあるのですが、いかさま師の顔も持っています。それで、仲間を呼んできたり、アイヌが関わったりするわけです。

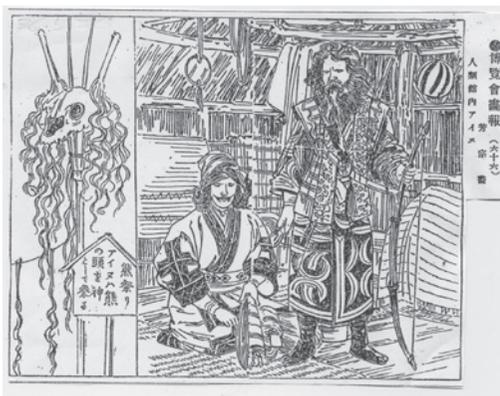
【図版〇一四】

坪井に関して言うならば、これが博覧会場に坪井が持参したという地図です。私が持っているのはA3ぐらいの大きさです。この地図を正面に置いて博多人形を飾るわけです。これを専門の人形師に作らせます。どんな人形が並んでいるか、私はまだ見ていないのですが、会場で配られたパンフレットを見る限り、いろいろなものがあります。フィジーやアイヌ、日本種族もいます。中国、台湾、ボルネオ、イギリスもありません。要するに、ここで一般に言われているように植民地の人間を展示しようとしていたのではなく、坪井としてみれば人種の多様性を展示したかったのです。「人種」とは、人々という意味でしょう。多分、当時の言葉を現代の言葉に翻訳していえば、「酒飲み人種」と言ったときの人種と同じ意味で、

【図版〇〇九】



【図版〇一〇】



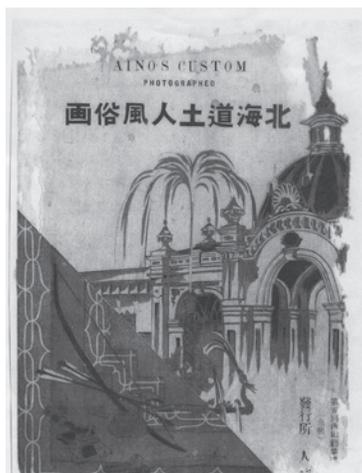
人々の集まりぐらいの意味しかなかったのですが、そういう人たちを並べているのです。

坪井は実は、こういう西田の企画があるということを知らなかつたようです。これは『東京人類学雑誌』に書いてあるのですが、人類館の話を知前になって聞いてびっくりしたという内容が書かれているのです。坪井はこの博覧会の企画自体には最初から関わっていないくて、直前になって協力を申し込まれたということです。

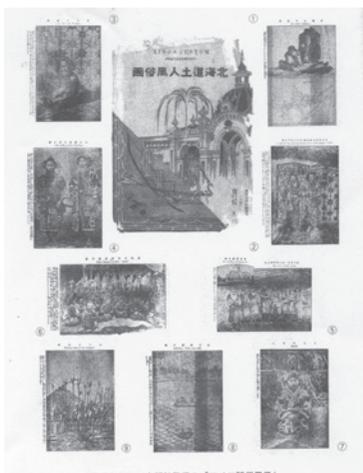
ここで一つ面白いのは、住友の話です。住友吉左衛門はすごいエリートで、貴族趣味の持ち主なのです。兄さんが西園寺公望です。生まれもそだちも良く、住友家に養子に來たのですが、住友は常々、金持ちというものは世の中に貢献しないといけなうと言っていました。その住友がアメリカに行つて、シカゴの金持ちに会つたのです。そうしたら、シカゴの博物館を造つたのは俺だと、その金持ちが言うので、それなら俺もやろうということで、日本に帰つてきて、明治三〇年代頃には中国の古代青銅器を五〇〇点ほど集めました。それらは京都の博物館（泉屋博古館）に最終的に寄贈されます。

住友吉左衛門は貴族的な考え方の持ち主であり、その考えに従えば、人類館はくだらない、こんな見せ物なんてやつてはいけなうと思つていたでしょう。住友は博覧会の協賛会（後援会）の会長でしたが、貴族趣味に合わなうということでも最初のうちは受け付けなかつたのです。人類館を補助の対象にもしませんでした。ところが、会期が始まつて、「學術人類館」と名前が変わつたのです。そのときになつて初めて住友は學術人類館を協賛会の仕事として取り上げようと思つたのです。

この人類館から學術人類館への変更は、開催が始まつた頃に行つたわけですから、非常に短期間で決まりました。それが行われたのは、坪井正五郎が関わつていたからでしょう。つまり、それ以前の人類館に関して坪井正五郎はあずかり知らなかつたということです。三月、開催が始まつてから、坪井は汽車に乗つて会場にやつてきます。そのときも果たして坪井が



【図版〇二二】



【図版〇二二】



## 川村 伸秀

四人の皆さん、どうもありがとうございました。最初に申し上げたとおり、私は人類学に關しては全くの素人ですので、皆さんのお話のような専門的なところでフォローしていただいて非常に助かりました。

最初の佐々木さんのコロボックルは、必ずしも言われているように完全否定するようなものではないという話も興味深かったですし、清水さんの、坪井だけではなくて、人類学の歴史をもう少し広い視野から見たいだいて、しかも人類学そのものがどちらかというとアマチュアの学であったというのは面白かったと思います。

また、関さんのおっしゃった、八木樊三郎と坪井の仲があまりうまくいかなかったというようなことを僕も少し読んだことがあります。確か台湾に八木樊三郎が行くことになって、それに坪井が反対していたのだけれど、押し切って行ったのだと思います。ただ、坪井は、行つてからは八木樊三郎のことは認めていたのではないかと思ひます。\*

山路さんのお話では、人類館を坪井が企画したのではないかということで、僕も何となくそう思っていました。より詳しく説明いただき、ありがとうございます。ただ、一つだけ、地図のところでも博多人形を展示したとありましたが、坪井が博多人形で各国の人々の像を造ろうと考えたのはもつと後の話で、このときは確か紙か何かを切つて人物を作つて展示したのだと思ひます。博多人形で作つたものは、前に東大で博物館の展示をしたときに展示されていきましたので、東大の総合研究博物館の方にあるのではないかと思ひます。どうもありがとうございました。

（\*）これに關しては、その後『寒川町史研究』第二十七号（寒川町、平成二七年三月）に掲載を予定している「大神塚古墳にみる坪井正五郎人脈」のなかで述べたので、その箇所を引用しておく。最初にある引用は「坪井正五郎家庭日記」明治四十二年六月二十二日からの引用である。（川村・記）

午前教室にて常務。午後同上。四時帰宅。食後國學院大學へ行く。（寒川神社近傍古墳調査報告講話会出席の爲め）六時半開会菟田茂丸氏開会の辞、八木氏古墳調査報告を述べ。終て発見品の实物に付いて説明する。八木氏と電車にて帰る。

ここで気になるのは、十八日に「八木氏来話」とあるのと併せて「八木氏と電車にて帰る」という記述である。というのは、清野謙次は「先進考古学者としての八木樊三郎氏」のなかで、明治三十五年十月に八木が台湾總督府学務課囑託として赴任することになったとき「坪井氏と八木氏との間に意見の疎通を欠いた」（前掲書、六四八頁）と述べており、その後先にも触れたように八木は台湾から東京に戻ることになるのだが、「坪井氏の不興を蒙つたのは八木氏

に取つては其後何彼につけて非常に不利益となつた。それと云ふのも就職其他の場合には八木氏の性行その他に就て坪井氏に問合せが来るのであるが、快い返事が無いからであつた〔同頁〕とあるからである。このことについては、鳥居龍蔵も自伝『ある老学徒の手記』（『鳥居龍蔵全集 第十二巻』朝日新聞社、昭和五十一年九月）のなかで次のように述べている。

神田宝亭で開催された八木氏送別会において、坪井先生は立つて「〔中略〕私は八木氏にいつて置こう。もし八木氏が再び教室に入らんとしても、その時は決して入室を許さざれば、そのことをかたく申して置く」といわれたそうである。〔二二五～二二六頁〕

但し、これをそのままストレートに受け取つていいかどうかは疑問が残る。文中に「といわれたそうである」とあるところから、鳥居は送別会の場にはおらず、出席した誰かから聞いた伝聞であることが判る。また、もし坪井と八木が反目していたとするなら、坪井はわざわざ送別会に出席するだろうか。台湾行をめぐつて二人の間に齟齬があつたのは事実だろうが、だからといつてはたして坪井がそこまで深く八木を憾んでいたとは思えない。そう考えると、この坪井のスピーチも、八木を送り出すための励ましの反語と取れないことはない。真偽のほどは確かめようがないが、もし仮にそれが事実であつたとしても、少なくともこの明治四十一年の時点では、八木が坪井の許を訪ね、講話会のあとでは電車で一緒に帰るまでの仲であつたことは、この大神塚古墳発掘をめぐる「共同日記」の記述から確かめることができる。

### Ⅲ 全体討議

(司会) ありがとうございます。

この中からどうしてもという方、特にわざわざ九州からおみえになった鳥越さん、何かご発言はありますか。

(鳥越) 坪井正五郎は三越児童博覧会などにも参加していたのですが、確か東京の上野公園で明治三九年に行われたことも博覧会でも、「世界のこどもたち」というタイトルで講演しているということを児童博覧会に関する論文で読みました。坪井正五郎が児童に関心があったということに関しては、川村さんはどうお考えでしょうか。

(川村) 多分、関心はあったのだと思います。「三越」という雑誌があったのですが、その中で坪井は随分、児童に関する考え方を述べていたと思います。具体的にどうだったのかは覚えていませんが。ただ、先ほどの上野の話は僕は知りませんでした。三越でこども博覧会を何度か開催して、その企画にも巖谷小波と一緒に関わっていたということは読んだことがあります。

(清水) 川村さんの本を読んで非常に印象深かったことの一つに、二六八ページの「海と人の関係を示す児童用絵本について」があります。これは、坪井が制作した絵本について坪井自身の解説文(同じ内容と思います。が人類学雑誌にも転載されました)を交えて川村さんが解説されているのですが、絵本が具体的に取り上げているのはいわゆる未開の人たちばかりで、最後に少し、海が大事だ、日本もこれから活用しなければいけないとあります。これは自分なりの時代に合わせたコメントだと思うのですが、絵本の題材は全て未開の人たちのごとばかりです。坪井はこれを日本の子ども用の絵本にして、なおかつ教育用にしようとして

います。これは山路さんが言及された世界の民族地図の中にイギリス人も入っているのと同じように、自分では言語化していないかもしれないけれども、民族・風俗の一種の平等観みたいなのを彼は頭の中に持っていたのではないかと思えます。

この時代の進化論者の言説はアンビバレントで、理論化して言うときには未開・野蛮・無知蒙昧（もうまい）・論理的ではないみたいなきことを言うのですが、その一方で、フレイザーなどは典型ですが、未開風俗が好きで仕方がなく、その中に意味を見出して追求していくわけです。そういう意味でメッセージは非常に多義的で、その多義的なところで帝国主義の枠みみたいなものにはまらないものは沢山あったと思うのです。

もう一つ、関さんのお話に対するコメントですが、日本人は石器時代人に入っていないのですが、モースは、記紀の神話よりも以前、石器時代に食人をしていたと言っています。それをそのまま日本人とすると、日本人の先祖が食人をしていたということになるわけで、坪井たちにはそこを切る必要があったのだと僕は思っています。

**(司会)** 他にご発言はよろしいでしょうか。

**(中見)** 一つだけ確認したいのが、人類学という言葉が日本でいつできたかということですが。私は数年前に「岩波講座『帝国』日本の学知」の「東洋学の磁場」で、日本で東洋史・東洋学はいつ始まったのかということを論じたのですが、それぞれの学問の名前をどうやって作ったかということは難しいのです。人類学という言葉は誰が最初に使いましたか。というのは、ある意味、アンソロポロジーを人類学と訳す必要もなかったのです。それから、これはむしろ清水先生と後でできたらお話したいのですが、エスノロジーは最初は人種学で、土俗学は英語に訳せばエスノロジーでしょうか？

**(清水)** エスノグラフィイです。

**(中見)** いや、グラフィイの方は取ったとしても、多分そうだと思うのです。むしろ一番伺

いたいのには、人類学を日本語で最初にいつ、誰が作ったのか。例えば哲学だったら、日本人が作った言葉なのです。というのは、恐らく人類学はアンソロジーから訳して、それが中国語にも入ったと思うのです。また、あるときから土俗学が民族学と変わったのは、日本人の民族の発見、つまり大日本帝国ができて満州国をつくることによって、民族というものと対峙しなければならなくなったので民族学という学問ができたのだと私は思うのです。人類学の方は、人類館というものを造ったのだから、そのときは人類学というものがあつたと思うのですが、この初出は分かりませんか。

〔川村〕 確か坪井が人類学と訳したと読んだような気もするのですが、それは記憶が不確かです。それについては、與那覇潤さんが書かれたものに載っていたように思いますが、今はつきり覚えていませんけれども、Anthropology を坪井が「人類学」と訳したと読んだのはそれだったような気がします。（\*\*）

〔清水〕 人類学を最初に坪井が名付けたときに、平仮名で書いたのですね。私も、その人類学をどこから持ってきたのか、彼が考え出したのかというのが非常に疑問で、人類学の初出とは何なのかということを私もずっと知りたいと思っていました。坪井の文章によると、坪井が参照した英語と日本語の辞書の中には、anthropology の訳語に「人類学」という言葉はないのですね。でも、彼は「人類学」という言葉を使っているのです、どこからか持ってきたのだと思うのですが、それは私も知りたいと思っています。

〔民族〕 という言葉はなかなか難しいのですが、鳥居も既に、むしろ非常に積極的に使っています。山路さんもおっしゃいましたが、坪井にとつて、人種とは人類の小分け、細分であり、人類を分けていくと人種になって、人種をさらに分けていくと種族になるという分類だと思えます。そして、人類・人種は身体だけでなく、風俗、言語も含めて、相対的な差異によって系統図の中で分けていき、種族なり人種なりという言葉を使っています。だから、

（\*\*）與那覇潤著「近代日本における「人種」觀念の変容——坪井正五郎の「人類学」との関わりを中心に」（『民族学研究』第六十八巻第号、平成十五年六月）で確認したところ、これは記憶違いであると判った。同論文には、「『哲学字彙』（明治四年）には「Anthropology 人類学」も掲載されているのであって、この時点で少なくとも知識人レベルにおいては「人類学」は市民権を得たのだといつてよい」（八八頁）とある。また、これ以前に加藤弘之が明治三年に脱稿した草稿「日本之開化 二」に「人類学者」の文字があり「明治三年までには「人類学者」の用例が成立している」とも與那覇氏は述べている。（川村・記）

日本人種と言ったり、日本種族と言ったりしているのです。

鳥居も自分のやっていることはエスノロジー、人種学だと言っているのですが。その下に土俗学、土俗誌あるいは民族学があるという形で、エスノグラフィの意味でそれを訳しています。エスノロジーは人種学、その下の個別の研究であるエスノグラフィが土俗誌あるいは民族学というように鳥居は使い分けていました。坪井も大体同じだと思いますが、鳥居は種族とほぼ同じ意味で民族という言葉を使っています。人種学という言葉は民族学という言葉に転換したのは岡正雄なのですが、岡は自分自身では民族という言葉はほとんど使わず、種族という言葉を使っています。民族という言葉を使いながら、民族がキーワードではないというのが、岡の民族学らしいです。

「民族」はヨーロッパ語には直接対応する言葉がなくて、nationでもないし、英語にはエスノロジーの *ethnos* (エトノス) に相当する言葉はありませんね。「民族」は日本独特の言葉だと思います。

(中見) まさに、だからこそ今の中国の民族問題は非常に特殊な表現になってしまふ。先生がおっしゃるとおりなのですが、要するに日本民族学会の初代会長の白鳥庫吉は東洋史なのです。白鳥がヨーロッパに行ったときに習った東洋学は、文献学とエスノグラフィなのです。

ただ、日本で民族という言葉自体が人口に膾炙したのは一九三〇年代以降だと思っています。そのときの民族の語源は *nation* ではないのだと思います。ドイツ語の *Volkerkunde* だと僕は思います。そこでヨーロッパ式のナチズムが入っている。岡正雄さんはウィーン大学に行つて、ああいう民族問題というものに出てくるわけでしょう。あまり言うとう日本のひがみみたいな形になってしまうのだけれど、やはりそういう一面は僕はあつたと思います。

日本の民族という言葉自体は、もともと鳥居龍藏だつて白鳥だつて使っているのです

ね。ただ、民族学という形で、それまでの土俗学から変わってきたのは、一九三〇年代以降だと思うのです。そのときの民族というのは、どちらかというと nation ではなくて、Völkerkunde だと思います。

(山路) 人類という言葉が日本語でいつ出てきたのかは私は分かりません。坪井が使っているなら、その頃か、それ以前かもしれない。ただ、民族という言葉が出てくるのは、日露戦争の頃です。その頃、国粹思想がはやってきます。そうした人たちは人類学とは全く無関係で、思想家や歴史や法律の分野の人たちでした。そして、明治の終わり頃から大正にかけて、今度はヨーロッパから進化論が入ってきます。そうすると家族、氏族という階層秩序のなかで民族を位置づけるという考え方がどっと入ってきたわけです。一般的に使われ出したのはそういう方面からであって、人類学者には民族(エトノス)という言葉はまだ耳慣れていなかったはずですよ。

そして、西村真次という人が昭和の初め頃について、『民族』という雑誌が出たときに、なぜ、民族という言葉を使うのか、フォークロア(「民俗」と内容的には同じではないか、よく分からない言葉が出てきたという趣旨のこと)を言っています。昭和の初め頃になっても、人類学会としての用語は育ってはいなかったということが言えるのではないのでしょうか。ただし、人類という言葉の起源に関してはよく分かりませんね。(\*\*\*)

(司会) では、主催者としては、このまま川村さんを中心とした二次会の方に持っていきたいと思うのですが、よろしいでしょうか。それぞれコメントを頂いた方も、質問のあまりの濃密さにたじたじとしておりますが、ひとまずここで区切りといたします。川村さん、今日はお忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。

(\*\*\*)[「人類」という語彙自体はすでに加藤弘之が『国体新論』(明治七年)で使用している。「天皇ハ我輩人民ト同ジク人類ナレハ」という表現である。しかし、この言葉が政治学的、形而上学的な意味で、現代の用法と同じであるのが、疑問である。

## 基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」とは

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。また他方では、その対極にむかう方向性として、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフオーダンス、社会空間など個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、すなわちミクロー・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向を前に、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究を超えた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点において先導的な役割を担うことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の創生を企図するものである。

### ● 研究主題のさらなる焦点化と先導化にむけて

—〈情動 affectus〉と〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる臨地・理論研究  
(二〇一三年六月追記)

過去三年にわたる共同研究活動を通じ、本基幹研究では、ミクローマクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当

の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に収斂するのではないかの視座を得た。

情動とは、個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共存する身体が互いに影響しあうことで生み出される反響関係に焦点化するための概念である。その関係は、人と人の関係のみではなく、人やもの・環境など様々な関連性のプロセスを含む。主体やエージェントといった人間の意志を起点としてのごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとくに巻き込まれていく受動性とそこから浮かび上がる生の現実を照射することを目指しているといえよう。それは、スピノザやドゥルーズに影響を受けた近年の情動論的転回 (affective turn)、「身体性的人类学」、アクター・ネットワーク論などの動向とも共振する理論的方向性をもつものといえる。

複数的な情動の連鎖をつうじて、人びとの想像力に胚胎するモラルの次元にまで視野を展げてみよう。社会的なものは、これまで「市場外要素」のような消極的な価値づけを施されることも確かにあった。しかし、グローバル化(グローバル経済、グローバル内戦…)の今日、社会的なものもつ創発的な価値が、経済的なもの、あるいは政治的なものとの対照において、人類学の分野でもひとときわ光彩をはなつ主題として再浮上しつつあることは示唆的であろう。

今世紀に入り、人間の生が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない。そうした時代状況のもとで、私たちは己れの生をなおも継続していかねばならない。これまで、人間の生をめぐる思考は、不確実性をそれ自体として見据えることなく、確かに実在しているように見えるものを抛りどころとして展開される傾向があった。しかし、不確実性を「リスク」と「チャンス」の計算式によって覆い隠したままでは、生の現在性に真摯に対峙する学的営為の芽は失われてしまうだろう。「感情と構造」のよう

な秩序志向の概念対立としてではなく、今日の世界各地で生じつつある未知の社会的胎動を感受するために、そして人類学の内部にいままた新たなアクチュアリティを回復させるために、情動と社会的なものの変化する現場⇨フィールドでの探究を、本基幹研究のさらなる先導的課題として、ここに明示する次第である。

【参考】

西井涼子 『情動のエスノグラフィ』京都大学学術出版会、二〇一三年。

真島一郎 『モース・エコロジック』『現代思想』三九（一六）、二〇一一年。

床呂郁哉・河合香吏編 『もの人類学』京都大学学術出版会、二〇一一年。

三尾裕子・床呂郁哉編 『グローバルゼーションズ』弘文堂、二〇一二年。

カイエ、アラン 『功利的理性批判―民主主義・贈与・共同体』以文社、二〇一一年。

菅原和孝 『感情の猿⇨人』弘文堂、二〇〇二。

デュピュイ、ジャン⇨ピエール 『ツナミの小形而上学』岩波書店、二〇一一年。

ロバーツ、マイケル 『ナシヨナリスト研究における情動と人』『思想』八二三、一九九三年。

※表紙の坪井正五郎写真は東京大学大学院情報学環所蔵のもの

基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」

二〇一三年度 第二回公開セミナー（二〇一四年一月二三日）

『坪井正五郎』の著者川村伸秀氏を囲んで

編集・発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三一―一

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://coe.aatl.u-t.ac.jp/kikanjinrui/>

発行：二〇一五年三月一六日

表紙デザイン：中村恭子

印刷・製本：株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三